女子國文 巻四

375.9
Ha7
資料室

42150
教科書文庫
4
810
42-1918
20000
17999

茶の湯と生花

資料室
375.9
H67

大二 正七 年 文部省檢定濟 高等女學校 國語科教科用書
七月 四日

女子國文

文學博士芳賀矢一編

東京 冨山房發兌

広島大学 教 17999 図書

女子國文卷四

目次

一　日本國民と自然美……一頁
二　茶の湯と生花……六
三　少女の心得……一〇
四　菊は婦人の理想……一三
五　草花……一六
六　清淨潔白（自修文）……一八
七　大海原（韻文）……二四
八　南歐紀行……二八

九　詩的農園……三六
一〇　高橋東岡の妻……四一
一一　根氣の有無……四四
一二　歐洲婦人の活動……四九
一三　霜枯……五二
一四　紐育の繁華……五八
一五　世界の三大瀑布……六三
一六　活版……六八
一七　漢字の構造……七二
一八　元旦……七四
一九　新年狀　右の挨拶（書簡文）……七六

二〇　新年の海……七九
二一　七福神（自修文）……八七
二二　甲冑堂……八九
二三　石炭の利用……九五
二四　鄕里の祖母へ（書簡文）……九九
二五　世の中で一番怖いもの（自修文）……一〇一
二六　努力と奮鬪と嗜好……一〇六
二七　朗詠（韻文）……一一一
二八　梁川星巖の妻……一一三
二九　淀川……一二一
三〇　衣服と精神……一二八

目次

三一　織物の進歩……一三二
三二　家の紋……一三七
三三　税所敦子君の棺の前に誄す……一四一
三四　キャベル孃……一四八
三五　德川光圀……一五一
三六　皇室に關する敬語……一五八
三七　詞づかひ（自修文）……一六三

終

廣島大學圖書之印

女子國文卷四

千木高知
太敷立て
綱根
すり衣

一　日本國民と自然美

上代に於ての衣食住は、多くは我が國土に繁茂して居る植物から材料を取つた。千木高知といふ千木も、太敷立てといふ宮柱も、みな木材であつたことは言ふまでもなく、藤葛を以て括りつけて之を綱根といつた。楮衣のしろたへ、麻衣のあらたへ、之を染めるのは草木の汁で、すり衣であつた。正木、日蔭等の蔓草

を取つて、かづらともし、手繦ともした。梓、櫨、檀を以て弓を作り、柳、篠を以て矢をはいだ。葉盤、葉椀は木の葉を編んだものらしく、今の茅卷、柏餅に其の名殘を留めて居る。萬葉集の

家にあればけに盛る飯を草枕
旅にしあれば椎の葉に盛る

といふ歌で、上古時代の風俗も分る。到る處植物の繁茂した國土は、國民に向つて、衣食住の材料をすべてそれから取らしめたのである。

日本の娘の着物の模樣のはでやかなのは、西洋人

草枕

友禪
繻珍

重ねの色合

の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、尙更それよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染まつて來る。昔のしのぶの摺衣、今の振袖模樣、裾模樣、つまりは同じことである。菊や、櫻や、梅や、牡丹を大きく染出した縮緬、友禪、繻珍の帶から、下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木、花模樣で飾られてある。其の色合の名稱でも、櫻色、桃色、山吹色、栗色、葡萄色など、植物界から取つた名が多い。昔の女裝束は櫻重ね、梅重ね、山吹重ねなど、重ねの色合は、常に四季折々の花に因んであつた。優しい女流の裝束は當然

縅

ともいはうが、武士の戰爭にいでたつ甲冑裝束にも、小櫻縅、卯の花縅など、如何にも優美ではないか。總じて我が國の甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、如何にも美しい華麗なものであつた。馬の鞍にも靑貝おいて、花などを散してある。

日本人が、如何に植物界や一般自然界に趣味を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、お萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見して、一層其の多い事が分る。松風、紅梅燒、磯松、桃山などの一般名稱は言ふまでもなく、椿餅、撫子餅、櫻餅の外、植物以外の自然に取つたものでも、洲濱、時雨、越の雪、落雁、鹽竈、さゞれ石等の類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子は別して松の葉や、菊の花や、すべて花木の形に拵へるのである。藤村(一)の目錄などを見れば、細かい名は夥しいものである。汁粉の名なども十二月に配當して、夫々雅稱がある。酒にも櫻正宗がある。菊正宗がある。劔菱がある。山川の白酒がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられるが、魚類の料理もまた植物界とは緣が離れぬ。刺身、鮓の下には笹の葉を敷く。牡丹餅を贈るには、重箱に南

(一)東京市本郷區の有名なる菓子店。

匙

天燭の葉を敷く。料理の膳椀は、金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器、陶器一切の美術工藝品が、多く草木花鳥の繪であることは固より言ふまでもない。これは裝飾美術として、近世の歐羅巴の美術にも尠からぬ影響を與へたものである。茶の湯の棗などはもとより、俗に匙を蓮華といふのも優美である。

二　茶の湯と生花

坪内雄藏

凡そ茶を味ふに三樣の法あり。急須、土瓶などに普通の茶を煎じ出して用ふるを煎茶といひ、特製せし

茶を臼にて碾きて粉とせしもの少量に熱湯を注ぎ、さて搔廻し、泡立たせて用ふるを薄茶、其の稍多量なるに熱湯を注ぎ、搔廻して用ふるを濃茶といふ。薄茶濃茶には種々の方式あり。これを茶の式と名づく。

茶の湯は東山時代に始り、其の流派甚だ多し。千家(一)、有樂(二)、石州(三)等の流派のうちにて、最も廣く行はるゝは表、裏の両千家流なり。昔は清雅なる娯樂の間に、禮式作法の要旨を教へて、武人のあらくしき心を和げ、かねては奢侈を戒めん爲の遊なりしが、德川時代に及びては、一種の表立ちたる禮式として用ひらるゝ

(一)利休流といふ。其の祖千利休は信長、秀吉に仕ふ。
(二)織田信益を祖とす。信益雅號として有樂と稱す。
(三)片桐石見守貞昌に始る。

風情

に至りたり。今も尙中流以上の社會に行はる。

生花は手折りたる花を瓶又は盆に移し生けて室内の風情を添へ、床の間の飾となす法をいふ。推古天皇の御代に、聖德太子が花の枝を水に生くる法を小野妹子に授けさせ給ひしに始るといふ。妹子はいはゆる池坊流の遠祖なりとぞ。池坊の外に、なほ遠州流(四)などいふ派もあり。

（四）小堀遠江守政一を祖とす。

花を生くる器には、瓶を用ふるを通例とすれど、時としては竹筒、砂鉢、薄ばたなどをも用ふる事あり。又籠製の花活、竹にて編みたる、藤蔓にて作りたるなど、

坐作進退

なまなかに

其の種類いろ〳〵あり。

花の種類及び生方は、いづれも器につれて差別あるべし。又床の間の位置、置物、掛物の種類、庭などによりても多少の工夫あるべきなり。

これを要するに、茶の湯の本意は主客の秩序を正し、坐作進退の禮法を定めて、溫雅、靜閑を旨とす。故に其の精神に通ずる事を得ば、必ずしもくだ〳〵しき儀式を學ぶに及ばざるべし。

生花も亦同じ理なり。强ひて枝を曲げ、作り撓めて自然の風情を損ひたるは醜し。なまなかに或流儀に

泥む

泥まんよりは、手折りたる儘を投入れたるが、風流の本意にかなふことあるを忘るべからず。

三　少女の心得

下田歌子

かたほ笑み

節くれたる深山木

しめ結ふ

年若き少女は花の如くなるべし。色麗しく匂ひやかなるこそよけれ。例へば、打向ふ人の、覺えずかたほ笑みて、しばしは心の憂さを忘るゝやうにあるべし。節くれたる深山木の、見るからに疎ましく、凄じげなるやうにはあるべからず。さりながら、此の花は、しめ結はれたる垣の中の花なるぞよき。ゆめ路傍の花のごとくになありそ。日常の起居ふるまひ、ものの言ひざま、すべて恭謙の德溢るゝやうなる中に、また一種犯すべからざる樣あるべし。これは高貴の婦人にしかあるべしといふのみならず、たとひ身は下ざまに生れたる者なりとも、氣品の高きは貴女に讓るべきにはあらず。

下ざま

氣品

されば、若き少女の、人に對してはにこやかに愛々しく、よろづつゝましげに耻づかしげなるはよし。されど、事もなきにから〳〵と笑ひ、やゝもすれば、身振、手眞似に體をくづしたるなど、いとあさまし。「君子は

其の獨を慎む
傍若無人

其の獨を慎む。」とこそいへ、まして年少の女子は獨居る程だに、いさゝかも傍若無人の身振をなすべからず。如何にも物しとやかにして、騒がしからず、輕々しからぬやうにあるべきなり。

然れども、こを取違へて、折角身體、四肢の發育に大切なる時期を、人形のやうに造り据ゑられてあれと言ふにはあらず。出來得べくば、其の衣服をさへ改良して、十分なる運動をなし、西洋婦人のやうに、富士の高嶺へも登り、大洋をも押渡りて少しも眩暈や、頭痛や、疲勞を覺えぬやうにありたきものなり。

眩暈

輕佻
築地

希はくは、活潑と輕佻とを取違へず、謙遜と卑屈とを誤らぬやうにあれ。仰げば高き築地の内の花、雲に聳えし色香の、清く氣高くこそあらまほしけれ。

—女子の修養—

四　菊は婦人の理想

棚橋絢子

菊の花の歌に詠まれ、詩に吟ぜられ、文章に書かれ、挿花とせられ、花壇に植ゑられ、或は繪畫として、或は衣服の模樣として、種々の裝飾と娯樂とに供せらるるのは、古よりの事でありまして、永き歳月に亙りての培養の結果は、殆ど理想的の花になり、之を人間に

標本

比を古人に求む

馥郁

喩へますれば、模範的婦人の標本であらうと思ひます。これが比を古人に求めますれば、辛うじて紫式部位がこれに當らうかと思ひます。

天地間の美は、多く花に集り、花の美觀は千姿萬態ではあるが、未だ菊の花のやうに色彩が豊富で、香氣が馥郁として、風姿が高尚優美で、花壽の長久なものはありますまい。私は植物學者ではありませんが、未だ菊のやうに紅白濃淡、様々の清い美しい色のあるものを見ません。また菊のやうに嗅感を痛めない、程のよい清香を吾等に送るものもあるまいと思ひま

優婉

竹の園生

朴直

す。しかも風姿優婉にして、高ぶらず、僻まぬのが、やがて宮中の紋所となつて、竹の園生に影を現す所以であらうと思ひます。ダリヤなども、美しいには相違ありませんが、其の姿からして、到底菊に及ぶことは出來ますまい。

それから菊は本末が直く、歪み曲ることを忌むものであります。さうして菊ほど柔順で、朴直なものはありません。人間の培養によつて如何様ともなります。大きな輪の菊でも、構はないと小さくなりますが、又反對に、小さな輪の菊でも、育方によつては、隨分大

きくなります。菊は此の如く、婦人の特性、殊に柔順の徳を表したものと存じます。婦人も亦朴直にして柔順でなければならぬと思ひます。私の此の頃の腰折に、

こし折らぬ人のまことの菊の花
本末なほく思ひたちけり

又菊の造りやうによつて如何様にもなることは、育兒上大いに鑑みねばならぬことと存じます。

―女らしく―

五　草花

大和田建樹

えもいはず

望は遠し

秋の雨寒し。萩は少しづつ咲出でたるが、露に半ば埋れたる様、えもいはず。前なるは紅、後なるは白、相雜りて地に敷かるゝは、今十日の後なるべし。

蕾尚綠なる女郎花は、筆の如き初穗の薄と丈較べして、力なき雨に打搖めく。夕の嵐を知らず顔なるも望は遠し。葉鷄頭の獨り抜出でて美しき、散りもせず、萎みもせず、濡れて愈〻色添ふを覺ゆ。

主人は花鋏持ちて庭に下りぬ。剪らるゝは萱か、紫苑か。垂れかゝる萩は少女の手にとらへられぬ。其の下蔭より水引の花は見出されぬ。冷たき雫は主人の

顔を打ち、襟に傳ふ。

—雪月花—

自修文

六　清淨潔白

小ざつぱりとした木綿物は氣持がよい、新しい青疊は居心がよいといふ我が國民は、清潔を愛する民族である。隣國の支那人などと比べては大きな相違である。日本人の様に盛に全身浴をする國民は外にはあるまい。東京市の湯屋は千軒もあり、其の外中流以上の家には各湯殿があつて、二百三十萬の住民の中凡そ三分の一づつは、毎日入浴する割合だといふ事である。ベルツ氏(一)は、日本の氣候家屋の割合に、リウマチスの少いのは、全く日本人が錢湯を好む結果だらうといつて居る。錢湯の起源は新しいに

(一) Baelz. 獨逸の醫者。長い間帝國大學の御雇教師であつた。

しても、湯あみ、水あみの習慣は太古からあつたのである。且日本全國、到る處に溫泉のあることも、他國には例が無いので、伊豫道後の湯には天皇(二)も行幸になつて、推古四年の道後の碑文は、我が文學史中の最古文の一標本である。其の外、伊香保(三)、有馬(四)、箱根(五)等の湯は皆歴史上に名高いのである。獨逸人のケーニグスマーク(六)といふ人の書いた「日本及日本人」といふ書の中には、日本人の入浴の事を賞揚して、これだけは大いに眞似すべき事と書いてある。伯林(七)市などでは公衆衛生の必要から、到る處に浴場を公設して、勞動者等の入浴を奬勵して居る。余は或夏田舍の冷泉浴場に遊んで、夏の事とて日々入浴したが、同行の獨逸人は、どうしてもはいらうとはいはぬ。全身冷水摩擦をやれば、

(二) 景行、仲哀、舒明、齊明、天智及び天武の諸天皇。
(三) 上野國群馬郡。
(四) 攝津國有馬郡。
(五) 相模國箱根山。
(六) Koenigsmark.
(七) Berlin. 獨逸の首府。

別に入浴の必要なしといふ論である。同人の言に、日本人の短命なのは、恐らくは溫浴を好む結果であらうなどと言つて居つた。ヂッチンゲン(八)といへば人口八千ばかりの町であるが、そこには一軒の湯屋もない。或滑稽雜誌で、若夫婦が新宅を探し歩いて、家主と問答中家主が「こゝには湯殿もついて居る」といふと、亭主の答に「なに我等はめつたに病氣にはならぬから、湯槽は入らぬ」といふ話を見た事がある。病氣にでもならなければ湯に入らぬ積と見える。中學校の讀本に日本人の記事を掲げて、入浴の事を記し「獨逸もむかし三十年戰爭迄は盛に入浴したが、其の戰爭の疲弊後、此の風が廢つたので、これは復古すべき事である。」と書いてあるのも見た。日露戰爭の最中でも、日本軍

(八) Sittingen　プロシヤ州の一小村。

人の最も不自由に感じたのは、入浴の不便の事であつたらしい。とにかく日本人は身體を綺麗に洗つて、サッパリとすることが好である。清淨は日本の特性であるとは、西洋人の日本に關した記事には必ず書いてある。チャンバレン(九)氏は、日本は多くの事柄を支那から輸入したが、これだけは、日本特有だといつて居る。支那あたりから來れば、殊に其の差異の著しいのに感ずるであらう。

日本人の全身浴は伊弉諾尊の神話に現れて居る。伊弉冊命がお隱れになつたのを黃泉國に行つて覗いて、汚いものを見たといふので、檍(あはぎ)原で御禊をなされた。御禊は身ソヽギで、身體を清淨に洗ふことである。目に見たばかりで身體が汚れるといふのは、潔癖の甚だしいものといは

(九) Chamberlain. 英國人。日本學者。久しく帝國大學の講師であつた。

黃泉國　死んだ人の住む國。

(〇) 日向國。宮崎郡檍村附近か。

潔癖　きれいずき。

ねばならぬ。すべて上代の日本人は、身體の汚も、精神の汚も殆ど同一に考へて居つて、身體を清淨にすれば、精神も自ら綺麗になると考へたのである。我等の入浴して垢を洗ひ落した後では、精神も自ら爽快になるから、かう考へたのも自然である。それで、もし道德上の罪惡を犯した者でも、身滌をすれば其の罪が消えて行くのである。多くの宗敎で懺悔をすれば罪が消えると考へたと同樣、身滌をすれば罪が消えると考へたのである。素盞嗚尊が神遣に遣はれ給ふ時は、髭を切り、爪を拔かせられたので、これは贖罪の爲である。此のはらひの思想は、祝詞の大祓詞によくあらはれて居る。これは毎年六月、十二月皇城の朱雀門で行はれたので、天下の萬民が、知らず識らずの間に犯し

懺悔　罪をくいること。
神遣　神から遣はれること。
贖罪　罪をつぐのふこと。
祝詞　祭や、はらひの時神に申上げる詞。

たすべての穢や罪をはらふ爲である。其の文を見れば、人人の罪はまづ河水とともに流れて行つて、早川の瀨に居る瀨織津姫といふ神が大海に持出す。そこでは速開都姫といふ神が之を一呑にのむ。それを氣吹戸主といふ神が根の國、底の國といふ汚い國へブウッと吹放つてしまふ。根の國、底の國に居る速佐須良姫といふ神は、之をどこかへやつて無くしてしまふ。かういふ風に、すべての罪が郵便物の樣に順々に神達の手に渡つて、遂に大海へさらりと流し捨てられるのである。此の祝詞の中には、身體の汚のみならず、色々な罪惡も數へてある。即ち一年に二度づつ、半年間の汚を流してしまひ、忘れてしまつて、又新しい生活をしようといふのである。これは恒例の祓であるが、

恒例　きまりとして行はれること。

形代　人のかたち。

其の外に臨時の祓といふものもあつた。又朝廷のみならず、民間でも祓の式を行つた。中古の物語日記には、祓の事があちらこちらに見える。百人一首の

風そよぐならの小川の夕暮は
みそぎぞ夏のしるしなりける

も六月の祓である。菅や茅で輪の形を作り、其の輪をくゞることは、今も神社で行つて居る。紙で形代を作つて、それに男女の別、年齢を記して祓ふことも、現今行はれて居る。皆昔の餘波である。

七　大海原

坪内雄藏

大いなるかな、大海原。

朝に、夕に、どうどうと
動き、轟き、夜もすがら
大浪、小浪寄せかへる。
いづこに打たぬ浪を見ん。
いつ浪の音を聞かざらん。
大いなるかな、大海原。
世界の山々ことごとく
崩すとも、海は埋るまじ。
世界の川々絶間なく
注げども、海はとこしへに、

蓬萊山もよそあらず

はやて

不增、不減の瑠璃の色。
長閑けき樣は海にあり。
風凪ぎはてし春の冲に、
朧にうつる月見れば、
荒ぶる心も凪ぎぬべし。
松島かげの朝ぼらけ、
蓬萊山もよそならず。
凄じさはた海にあり。
春秋二季の大あれに、
はやて起つて、浪立てば、

甲鐵艦も木の葉と漂ひ、
大高潮のさかまけば、
村々流れて跡もなし。
山はくづれ、川は涸れ、
國興亡し、人變り、
陸には古今の別あれど、
海原のみは、開闢の
神代のすがた其のまゝに、
動き、轟き、寄せかへる。

八　南歐紀行

巖谷小波

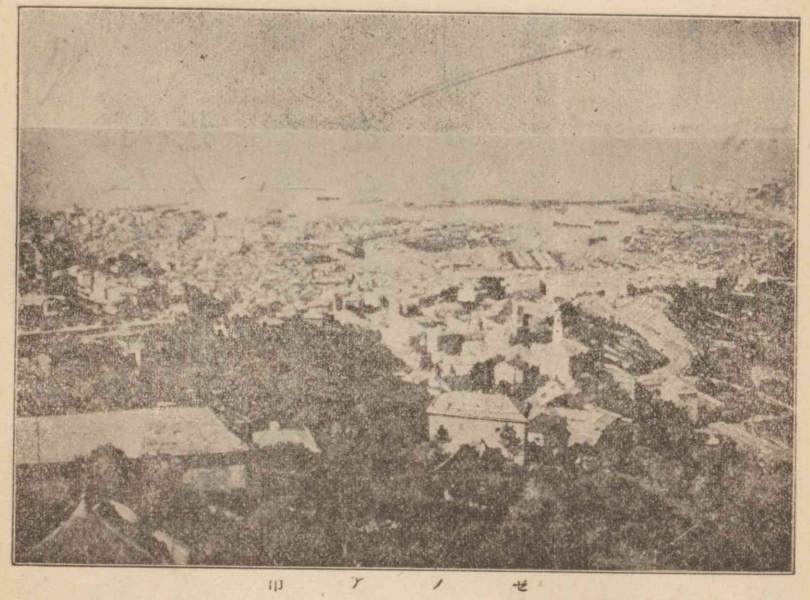
ゼノア(一)は人も知るコロンブス(二)の在所なり。されば其の記念の石像、停車場の前に立てられて、しかも吾等が宿りしは、つい其の側のホテルなりき。木曾殿と背中あはせの寒さは知らず、吾はこゝにコロンボと肩を並べし月夜かな

コロンボはコロンブスの事にて、伊太利讀にすれば却つてそれが正しきなりなどと、註を添へたところで、餘り感心した句にもあらず。

(一)Genoa. 伊太利第一の貿易港。

(二)Columbus. 亞米利加發見者。(西暦一四三六—一五〇六)

(三)「木曾殿と背中あはせの寒さかな」。(芭蕉)



公園はピヤッザ・コルエットといふ。此處には伊太利維新の豪傑エマヌエル(四)、マッチニー(五)などの立像あり。木々の紅葉の錦なせる間に、飛瀑の布を曝せる景色、遠く(六)寒山に上らずとも、石疊を走る電氣鐵道の客、大方は此處に降りたり。

(四)Emmanuel. サルヂニヤ王(伊太利王室の祖)。伊太利統一の志を抱き、西暦一八六一年伊太利王國を建て其の王位に即く。(西暦一八二〇—一八七六)

(五)Mazzini. 革命黨の首領西暦一八三一年青年伊太利黨を組織し伊太利統一を圖りしが成らず。(一八〇五—一八七二)

(六)「遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。」(杜牧)

公園に電車の停る紅葉かな

天長節も此の地に迎へつ。折ふし此の地も菊の盛とて、辻々の花賣る少女等、黄白床しの色を束ねて、吾等が袂を控ふるも嬉し。

床しの色

此の朝異國に菊をかざすかな

されば、此の菊かざして記念の寫眞とらばやと思ふに、生憎空むづかしうなりて、

小紋

石疊時雨の小紋ちらしけり

と見る間に、雨脚やゝ急になりて、

玉葱の市に轉がる時雨かな

頭腦

吾等も轉ばぬ先の馬車に乘りて、空しく宿に歸りぬ。

午後は雨も收りしに、再び出でて程近き離宮、アナンヂャッタ寺院、及び少し隔りたるカンポ・サント見物しぬ。カンポ・サントとは墓場の事なり。

離宮は總べて二百室あるなれど、見るべきは十二室のみ。玉座、寢室、便殿、食堂、化粧室、舞蹈室其の他室々の結構、吾等ぽつと出の赤毛布連には、一々眼を奪はるゝ事のみなれど、又退いて考ふるに、之しきは歐洲の通例、尙進みもて行く中には、枡ではかる程もあらんと思ひ返して、長くも留らず、隨つて頭腦に殘る程

の物もなかりき。

アナンヂャッタ寺院にて眼を惹きたるは、左右正面すべて十八九箇所の神壇(佛壇と云ひたけれど)の柱、何れも異樣なる大理石に、一々異樣なる意匠を施し、事なり。其の他天井の彩色、壁上の畫圖、欄間の彫刻、見るに頭の痛くなるを覺えつ。これを思へば日光自慢も、ちと考物にはあらずや。

更に驚きしはカンポ・サントなり。只墓場と云へば何の景色もなき樣なれど、これは正面の高き所は祭壇にして、左右何町かに渡る廻廊を、すべて納棺の場

廻廊

に當て、其の上に大理石をもて刻める故人の肖像を一々安置し、之に花を捧げ、燈を點ぜるなんど、取も直さず西洋の五百羅漢なり。殊に面白きは、其の肖像の尋常一樣ならざるにあり、或は妻子の之に添うて悲しめる、或は死神の强ひて拉し去らんとする、甲は微笑花に對し、乙は呻吟枕に凭るなんど、一々意匠を凝したれば、千狀萬態委しく記すに遑あらず。よしそは皆近業に係れども、大方名工の手になれりとぞ。斯道に心あらん人、一度此の地に遊ばゝ、否此の地に詣でなば、遂に歸るを忘れなんか。吾等も案内者に促され

拉し去る

近業

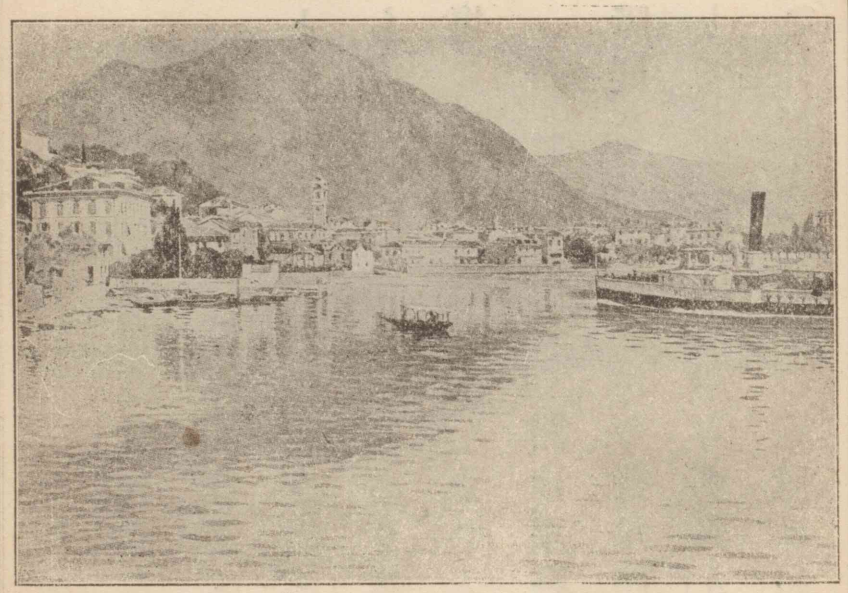
て、漸く門を出でんとする時、日ははや後の山に傾き、夕風寒く耳を掠むるに、覺えず外套の襟を立てぬ。

暮寒う馬車招くなり寺の門

ゼノアは夕の六時半に立ちて、汽車路を四時間ばかり、其の夜はミラノ(七)に一泊。茲は伊太利の舊都とて、日本ならば奈良ともいふべく、名所多しと聞きながら、先を急げば何一つ見ず。次の朝七時半ばかりに、伯林直行の汽車に乘込む。昨夜は雨と思ひしに、今日は幸ひ空晴れたれば、かくては瑞西の佳景をも擅にして、久しく陸上の美に飢ゑし眼を、漸くたんのうさせ

(七) Milano. 絹織物業の中心。有名なる寺院あり。

たんのう



コモの湖

る時來れりと、心も勇み立つ折ふし、それよと友の指ざすを見れば、右窓に見ゆる湖水の一面、聞けばコモの湖とて、まだ伊太利の領内なり。

朝霧の糢糊(もこ)已にしてコモの湖

—洋行土産—

糢糊

風致

障屏
紫翠
萋々

九　詩的農園

余はこゝに模範的農園として札幌農園を擧げんとす。然れども余の記さんとする所は、其の設備にあらずして、其の風致にあり。然り、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。

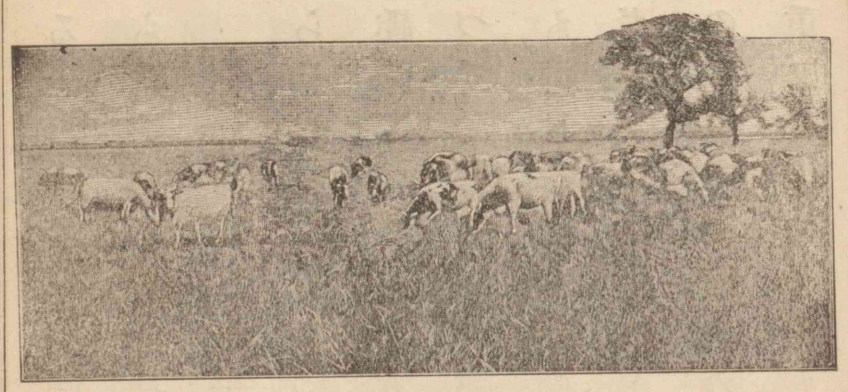
西北の二面全く開け、平野遠く連りて、西は札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指して、其の際涯を知らず。萋々たる牧草氈の如き處、こにはかの林中の雜樹の如く、他と相凌ぎ、相排せず、

Space.
場所の意。

潤澤

森々

空を摩す



札幌農園

廣きスペース(一)を占めて、處まばらに立てる楡樹の、晝は殘る隈なく日の光を浴び、夜は遺憾なく星の雫を受け、何に遮らるゝものもなき其の根は、太古のままなる土壤より潤澤なる養分を吸ひ、思ふ儘に其の特性を發達せしめて、蒼欝たる其の枝葉は百歩の地を蔽ひ、森々たる其の幹は百尺の空を摩するを見

詩趣

る。一たび足を農園の牧場に容れたる者は、何人と雖も、遺憾なく發揮せられたる楡の美に驚歎すべし。

それ廣漠たる平野の青きは、既に人の心を快濶ならしむ。別に處々に喬木の亭々たるを配する時、其の趣味即ち油然として起る。而も其の喬木の種類によつて、又大いに詩趣を增減す。かゝる平原を飾るに最も適せる樹木は、松の如きにあらず、杉の如きにあらず。實に其の高さと共に厚さを有し、厚さと共に又其の幅を有するもの、分明に言へば、其の枝葉十重二十重に密生し、こんもりとして晝猶暗き樹蔭を作る喬

繪の如く
詩の如し
點ず
活躍す

木たらざるべからず。請ふ、かくの如き喬木の、森々として青綠の平野に立てる事を想像せよ。何ぞ其の繪の如くにして、又詩の如くなるや。人若し十分にかゝる想像をめぐらす事を得たりとせば、其の人は即ち遺憾なく札幌農園を其の腦裡に描き得たるなり。

農園が楡によつて其の詩趣を加ふる事斯の如し。然れどもこれ唯植物界に於ける詩趣のみ。更に此の間に牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つて、農園の眞詩趣は始めて活躍す。

丈高く、四股長く、體軀驚くべき程巨大にして、黑白

悠々自適

の斑を有せる一種の牛が、其の大樹の下に一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短き一種の牛などが、此處彼處に草をあさる、或はさまよへる、或は尾を振れる、更に美しき毛を被れる一種の羊が、其の角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光に、人馴れて近づき來るなど、悠々自適の樣見えて、若し此の世に樂園なるものありとせば、其の關門は實にかくの如き處なるべしと思はしむ。

——菊池幽芳の文による——

蘊底
微祿
猾兒
いも寐ず

一〇　高橋東岡の妻

高橋東岡は通稱を作左衛門といへり。東岡は其の號なり。大阪城の番士にして、豐後の麻田剛立に就きて天文學を修め、暦術に精しく、よく其の蘊底を極めし人なり。此の人のいまだ微祿にて、且修業中の事なりけん、庭に大きなる柿の木ありて、秋毎に枝も撓むばかりに實生りけるを、市に賣らしめて家計の資としたり。然るに近邊なる猾兒等、闇夜に紛れて之を盜み取る事度重りければ、東岡其のまもりにいも寐ず、終夜樹下を見巡りて、曉に至る事ありき。

息まく

うたてや

便なさ

なからましかば……よからまし

或日東岡外に出でて、夕暮の頃家に歸りしに、さばかり太き木を、根際より伐倒してありしかば、驚き呆れ、あわたゞしく妻を呼びて、「何人の仕業ぞ、かゝるは」。と問へば、「わらはの仕業に侍り」。と靜にいひ居たり。「扨は物に狂ひしか」。と息まき責むれば、妻は涙を浮べて言ふやう、「君は必ず天文の學によりて、名を揚げ家をも興し給ふべき氣象見え給へり。されば勉めて天象をこそ窺ひ給ふべきに、うたてや、此の樹の爲にあたら時を費し、心を盡し給ふ事の便なさよ。此の樹なからましかば、學業專一になりてよからましと思ひ、かく人をして伐らせ侍りつるなり」。と答へければ、東岡此の詞に感激して、此の後はひたすら學を勵みけり

錯誤

さて寛政の初、東岡當時の曆法に錯誤あることを發見し、晝夜熟考せし上、阿蘭陀の曆法をも參照して新曆の案を作り、同七年之を幕府に上りしが、舊曆に比ぶるに頗る精密なりしかば、遂に改曆の議おこりて江戸に徵され、天文方に擢でられ、新曆取調を命ぜられぬ。同九年に至り、新撰の曆法成りて之を天下に頒たれしが、世に寛政曆といふはこれなり。東岡人となり眞率にして、學殖深ければ、從學する者甚だ多し。

擢

學殖

近世測量の大家伊能忠敬の如きも、此の門より出でたるなり。そもく東岡の學業成り、名聲の揚りしは、其の妻古烈女の風ありて、夫を勵ましたるによると、知る人後に語り傳へぬ。

——關根正直の文による——

一一　根氣の有無

坪内雄藏

目が横に附いて、鼻が縦に附いて、二本脚で眞直に立つて歩く、這ふ、しやがむ、坐る、横になる、跳ぶ、はねる、走る、引搔く、摑む、つまむ、ひねる。五本の指を一本々々に別々にも働かせる。要するに、手足ともに自由自在

根氣

白痴

に働く。おまけに、泣く、笑ふ、ほゝゑむ、ともかくも無數の節を附けて聲を發する。これが常識即ち普通世間の俗眼で觀て、人類と名づける一種の動物である。しかし、かういふのは單に猿猴類と違つて居る動物であると認めたまでで、嚴正な意味で人間をいひあらはしたものではない。

根氣、詳しくいへば、物事にじつと氣をつめること、言換へれば、物事に注意をまとめる習慣、これが人間となる爲の最初のしかも最も大切な資本である。

白痴の最も著しい特質は、根氣の全く無いことで

眞人間

ある。其の最も甚だしいのになると、飲食する爲に手足を働かすことさへなし得ないといふ。「氣をつめて働くよりは、死んだ方がよい」といふのが、馬鹿者の人情だといふことは、種々の事實によつて證據があがる。蓋し、白痴が眞人間になり得ぬ原因は、主として此の根氣の絶無なる點に歸する。聽く根氣が無く、見つめる根氣が無く、無論習ふ根氣が無い故、到底教育することが出來ず、隨つて、生れながらの馬鹿で終るのである。

さて又狂人が眞人間と違ふのも、半ば以上は此の

根氣、即ち一意專念の習慣の缺乏して居る點に存する。又彼の幼年が大人に劣り、未開人が文明人に劣る所以も、主としてこれが原因なのである。

要するに、馬鹿は全く根氣が無く、狂人はすぐ氣が變り、小兒はあちこちへ氣を散し、未開人もすぐ根を疲らせる。ワット[一]やニュートン[二]のやうに一心不亂に物事を考へるなどといふことは、未開社會には決してない。

「檐滴石を穿ち、燒點物を燒く」、「一念凝つては岩をも透す」が、「萬能は足りても、一心が足らぬ」は、何の役にも

檐滴　燒點　萬能

(一) Watt. 英國の人。蒸氣機關の發明者。(西暦一七三六―一八一九)

(二) Newton. 英國の大理學者。引力の理を發見す。(西暦一六四二―一七二七)

立たぬ。昔から今までに、苟も人間の功績といはれるものは、悉く皆根氣の生んだものである。蓋し、根氣少き者に、勇敢の氣のあらう筈なく、熱心などのあらう筈もない。

ニュートンは、「自分の他人に勝る所以は、單に注意力の一點に在り」と言つて居たといふことである。勿論注意力、即ち根氣さへあれば、それでよいといふことは無いが、せめて多少の根氣があれば、とにかく教へて貰ふことが出來、習ふことが出來、曲りなりにも自分の才覺、腕前で、自立自活することも出來るであらう。だから、根をつめるだけの修行はして、ともかくも並の人間までにはなつて、一生のうちに何かせねば、人といふ者に生れて來たかひが無いではないか。

曲りなりにも

才覺

—女子日本讀本—

一二　歐洲婦人の活動

歐洲大戰亂起りて、關係諸國の壯丁は皆銃を肩にして戰線に立てり。壯丁はおろか、丁年未滿の者も、老年に近き者も、國事につとめ國難を救はんと競ひ起ちぬ。貴族、富豪より下層勞動者に至るまで、社會の各階級を通じて、敵愾の氣象に充ちて、擧國一致其の敵

壯丁

敵愾

澁滯

を亡さずんば止まざらんとす。一たび國債を募集すれば、各自其の貯金を擧げて之に應募し、期日に達せずして、遙に豫定の金額に上る。幾回を重ぬるも、其の情況は同じ。

此の如き秋に際して、婦人の覺悟如何。傷病者及び遺族の看護慰問等に關する事業は勿論、知識ある者は學校の教員として、體力ある者は軍需品の職工として、或は官公吏員の職を奉じ、或は電車、自動車の運轉手となり、母も、妻も、娘も、男子なき家庭に在りて尙國家の業務に服し、多端なる公共の事務を澁滯せしめず、天晴なる歐洲婦人の活動振は、恐らくは有史以來未曾有の事なるべし。

毅然自ら守る

先蹤

「國民皆兵」といふ語は婦人を除外せるものにあらず、銃劍を執りて戰場に立つことこそなけれ、一旦の緩急に際しては、男子と同じく國家の公事に盡さん覺悟なかるべからず。さてこそ擧國一致の名實も全きことを得るなれ。

日本婦人の長所は其の柔順なるに在り、其の貞淑なるにあり。然れども毅然自ら守りて、男子に讓らざる決心を示せるは、國史上其の先蹤に乏しからず。歐

洲婦人の活動に鑑みて、尙其の祖先を辱めざる覺悟こそ肝要なれ。

一三　霜枯

德富蘆花

新兵入營の見送を、村の一年最後の賑として、あとは寂しい初冬の十二月に入る。

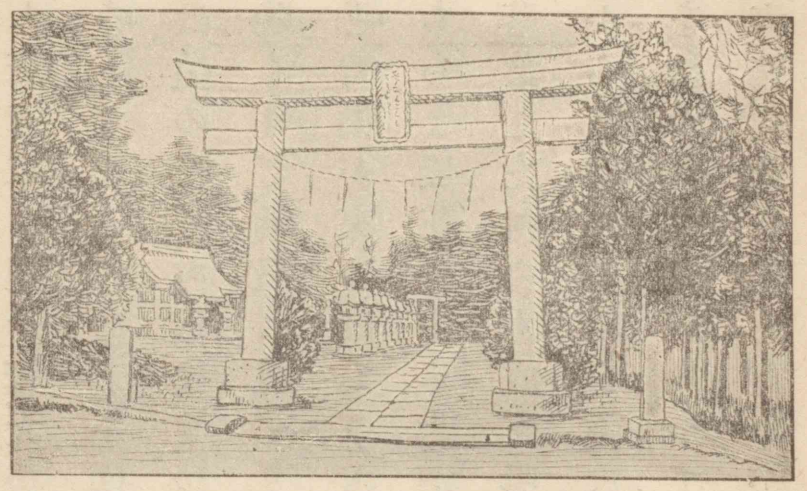
「稼収平野潤」晩稻も刈られて、田圃は一望がらんとして居る。畑の桑は一株づつ髻を結ばれる。一束づつ綺麗にゆはへた新藁は、風除がはりに、ずらりと家の周圍にかけられる。さらく〳〵と稻を扱く音、からく〳〵と唐箕車を廻す響、大根引、漬菜洗、若い者は眞赤な手をして居る。晝は北を圍つた南向の小屋の筵の上、夜は爐の傍で、內儀はせつせと股引や足袋を繕ふ。夜は晩くまで、納屋に籾ずりの響がする。だしぬけにざあと時雨が來る。ぱら〳〵と庇を打つて霰が來る。ちらちらと風花が降る。北から風が吹いて來て、騷々しく落葉した村の木立を鳴す。乾いた落葉が遽てゝからからと舞走る。箒を逆に立てた樣な雜木山に、長い鋸を持つた樵夫が入つて、くはへ煙管で、楢や櫟を伐る。海苔粗朶を積んだ車が村を出る。冬至までは日が益、

大根引

內儀

(一)武藏國荏原郡。

(二)吉田松陰の墓の側に在る松陰を祀れる小祠。



松陰神社

つまつて行く。五時には早小暗く、六時にはもう闇い。流しもとに氷が張る。霜が日に〳〵深くなる。

十五日が世田谷(一)のぼろ市。世田谷のぼろ市は見ものである。松陰(二)神社の入口から世田谷の上宿、下宿を打通して、およそ一里が間は両側にずらり店が並ぶ。

襤褸

押合ひへし合ひ

値切る

日用の品々は素より、あらゆる襤褸や、がらくたが、ずらりと並べられて、賣る者も賣る、買ふ者も買ふと、唯驚かれるばかりである。

見世物が出る。手輕な飲食店も出る。咽喉を稗が通る樣に、店の間を押合ひへし合ひして、ぞろ〳〵人間が通る。近郷、近在の爺さん、婆さん、若い者、女子供が、股引、草鞋で、大風呂敷を持つたり、荷車を挽いたり、目籠を背負つたりして、早い者は夜中から出かける。新しい筵、筍掘器、天秤棒を買つて歸る者、草履の材料や繼切れにする襤褸を買ふ者、古靴を値切る者、古帽子、古

洋燈、講談物の古本を冷かす者、稲荷鮨を頬張る者、玉乗の見世物の前に立つ者、人さま〴〵、物さま〴〵の限りを盡す。世田谷のぼろ市を觀た者は、世に一物も無用の物とては無いことを悟らずには居られぬ。

定に入る

此のぼろ市も過ぎて、冬至もやがてあとになり、行く〳〵年も暮になる。蛇は穴に入り、人は家に籠つて、霜枯の武藏野はさながら定に入る。寂しさうな烏が田圃を啞々と鳴きながら、此の樫の村から、彼の欅の村へとわたる。稀には洋服、ゲートルの獵者の銃先に、鳴や鵯のけたゝましく鳴いて飛立つこともある。困

の騒ぐ夜は、海の様な響が武藏野に起つて、人の心を遠く〳〵誘つて行く。

斷崖

中には東京の屋敷から賴まれて餅を搗く家や、小使取りのため餅搗に東京へ出かける若者はあつても、村其のものには何處にも師走の忙しさは無い。二十五日、二十八日、三十日、大晦日、暦の年の瀬は日一日と斷崖に近づいて行く。三里東の東京には二百萬の人の海、嘸様々の波も立たう。日頃眺める東京の煙も、

大息吐息

此の四五日は大息吐息の息卷荒く颶る様に見える。併し此處は田舍である。都の師走は田舍の霜月であ

復活の春を約す

る。冬枯の寂しい武藏野に復活の春を約して、麥が今二寸に伸びて居る。心好しの辰爺さんは、冬至が過ぎれば日が疊の目一つづつ長くなる、冬のあとには春が來ると云ふ信仰の下に、時々竹箆で、鍬の刄につく土を落しつゝ、悠々と二寸になつた麥のさくを切つて居る。

さく

—みゝずのたはこと—

一四　紐育の繁華

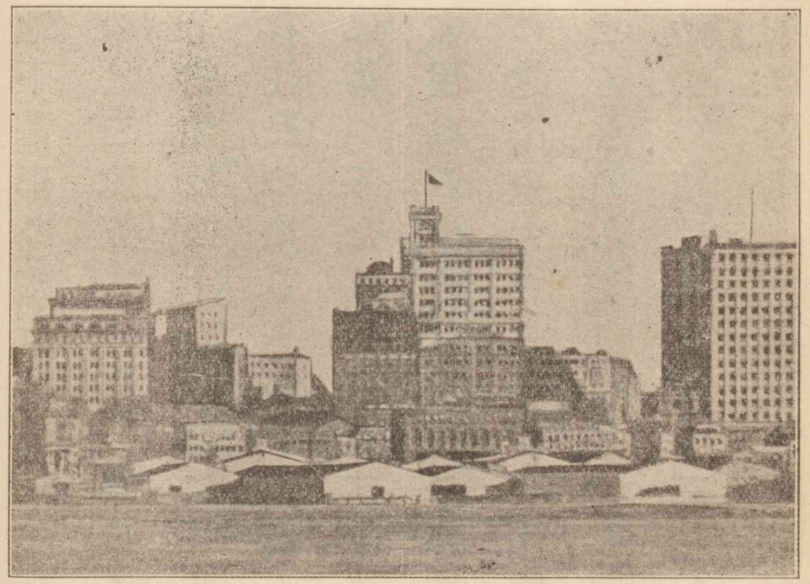
亞米利加人は紐育市の繁華を誇りて次の如く言へり。

地下電車の旅行客は一年三億四千萬人、市街電車のは二億五千萬人。汽車は十二秒毎に一列車到着し、船舶は四十八秒毎に一隻出帆す。

移住民の來る、毎年一百萬人に上り、紐育市の旅宿に落つる金は、毎夜百二十五萬弗以上なり。新築の家屋は五十一分毎に一戸落成する割合なるが、其の建築の大なる、一戸の工事に七千五百人を使用せるものあり。

婚姻の結ばるゝは十三秒毎に一回、小兒の生るゝは六分毎に一人なり。

國籍

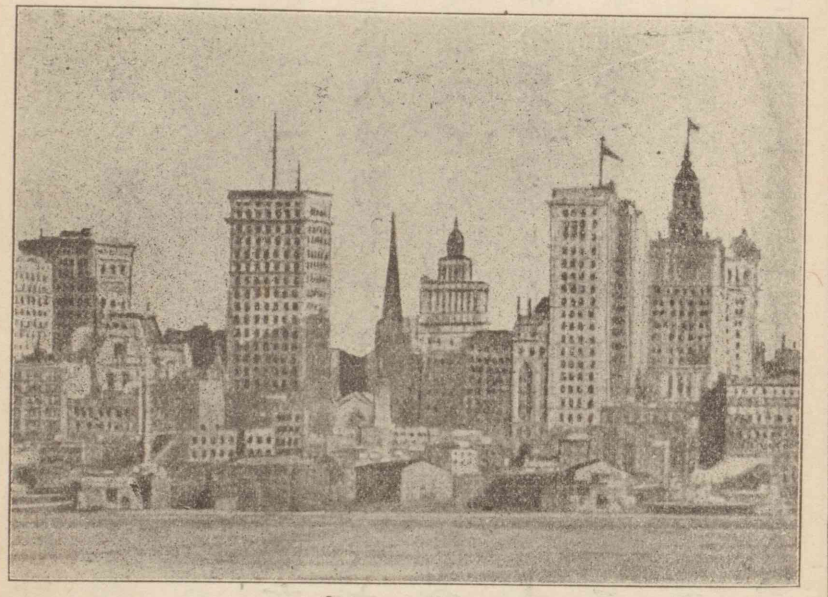


ニューヨーク

宗教各派に屬する寺院は一千九十寺あり。公共慈善の爲支出する金額、二百五十萬弗に達す。

一學校の生徒名簿を檢するに、二十七箇國の國籍を見る。

教育事業に關係する市の吏員は二萬五千八百人、警察吏一萬六百四十人、市内清潔係七千二人、消防係五千百四十五人、水道、瓦斯、電氣係は三千三百三十人、衛生係二千八百九十八人、船渠及び波止場係二千六百一人。



ダ市の外觀

國勢

これ一千九百十六年の統計なり。又以て米國國勢の一斑を窺ふべし。

一五　世界の三大瀑布

横山又次郎

世人は動もすれば、北米のナイヤガラの瀑布を世界最大であるかのやうに思つて居るが、阿弗利加内部の探檢家として有名な英人リビングストン氏(一)が、今から六十餘年前に、今のロデシヤ(二)北部の地で、ザンベジ河(三)の上流に當る所に、其の後ビクトリヤと命名された一大瀑布を發見した。以前ならばいさ知らず、

(一) Livingstone. スコットランドの人。(西暦一八一三―一八七三)
(二) Rhodesia.
(三) Zambezi.

いさ知らず

識者の笑

現在の如く地理學の普及した時代に、ナイヤガラを世界最大の瀑布などといふ考をもつて居るのは、識者の嗤笑をまねくの外はないのである。實に今日世界一等の名を博して居るのは、此のビクトリヤ瀑布に外ならぬので、近來は其の附近まで鐵道が通じたので、瀑布一帶の地は南阿住居の歐洲人の遊覽地とまでなつて居る。

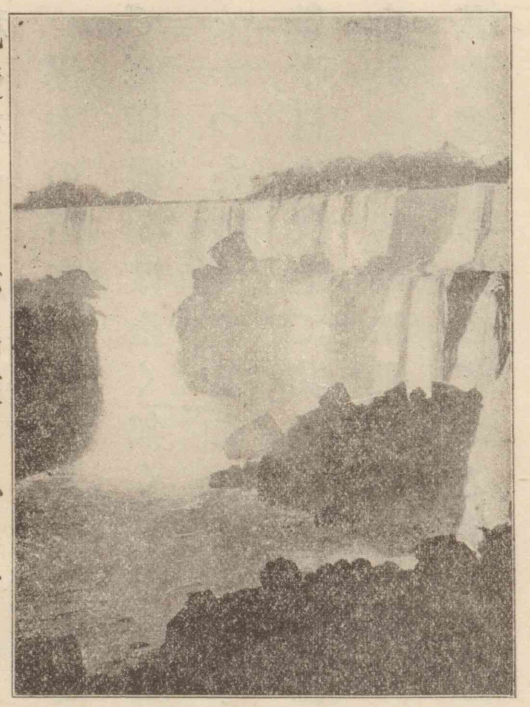
然らばビクトリヤ瀑布の次に位するものはナイヤガラかといふに、まだ其の前にもう一つある。それは地理學專門家中にも、まだ之を知るものの少いと

ナイヤガラ瀑布（上圖）と
ビクトリヤ瀑布（左圖）

いふ南米の一瀑布である。此の瀑布は、其の壯觀の點に於ても、又其の美觀の點に於ても、遙にナイヤガラ瀑布の上位にあるもので、其の水力に至つては、略これに二倍するのである。加之、壯觀

凌駕

といふ點に於ては、ビクトリヤ瀑布をも凌駕するといふ說までである。其の故は、ビクトリヤは、瀧の上は壯觀でも、瀧壺は前面左右に岩石が直立して全く見えないのに反して、南米のは、何れの部分も一目に見渡すことが出來るからである。此の瀑布は、ブラジル國と(四)アルゼンチン國との境界に在るパラナ(五)河の



イグアツ瀑布

(四) Argentine.
(五) Parana.

支流イグアヅ(六)河中に在るから、通例イグアヅ瀑布と稱へ來つて居る。

瀑布の所在地は人里を距ること非常に遠い僻地で、交通機關は全く無く、又近年まで道路も開けて居なかつたのである。よつてこれを見物せんとすれば、數十日を費して其の場所まで往來しなければならなかつた。其の結果、文明人のこれを觀た者は、いまだ甚だ多からぬのである。併し此の頃其の壯觀が漸く人口に上るやうになつたので、ブラジル、アルゼンチンの兩國は、工業家がこれを動力に用ひるやうな沒

(六) Iguaz

動力

風流の事があつては遺憾であるとの考から、まづこれを天然記念物として保存することに議決し、瀑布附近一帶の地を、壯麗なる一大公園とするとの事である。さてビクトリヤ、イグアヅ、ナイヤガラの三大瀑布の大きさは、左の通りである。

	高さ(尺)	幅(間)
ビクトリヤ	三九三	九九四
イグアヅ	一七二—二一四	一六五〇
ナイヤガラ	一六二—一六五	五〇三(カナダ側) 一七七(米國側)

地金

號別

一六　活　版

今日の活字はすべて鑄物にて、地金は鉛百匁、安質(アンチモニー)十五匁、錫四匁、銅一匁の合金なり。これを鑄物型の中に流し入れて活字とす。機械仕掛にて一時間に四號活字一千箇を鑄造すべし。鑄造の後、鑪にて字柱の四面をすり揃へて、其の幅、高さ等を等しくす。

活字は大小によりて初號より八號迄の號別あり。現今印刷物に最も多く用ふるは五號にして、六號、四號、二號之に次ぎ、初號、八號は殆ど用ひず。活版所にては、用ふること多きもの程、多數に備へ置くを常とす。

初　壹　貳　參　四　五　六　七　八

又字體により明朝、清朝、隸書、ゴチック等の稱あり。

明朝　清朝　隸書　ゴチック

此の內明朝は最も多く用ひらる。此の他、數字、記號、約物(ぐ)(「『(〔等)、圈點、導線(……)、連語線(——)、語學記號、發音記號、度量衡記號、界線、罫線、花型等皆入用なり。

數萬の活字は、號數及び書體によりて大別し、同號同體の漢字は、漢字字引の順によりて箱別に入置き、

文選

利字

假名は五十音順に入置く。之を組むには、まづ活字を拾ふ職工、即ち文選工は、原稿を手にして之を讀みながら、所要の文字を一つづつ彼の箱より拾ひ出すなり。されどかくては廣き文選場を往復して搜索するに時間と勞力とを徒費すること多きが故に、所謂利字の箱を備へ、これにて大部分の文字を拾ひ取るを通例とす。漢字の總數は三萬に餘り、其の中普通に用ふるもの四千ありといへど、最も屢用ひらるゝ字は八百五十位に過ぎず。されば之を一箇の箱に入置けば、七分通りは此の箱だけにて拾ひ得べしといふ。此

枠

の箱の中にても、一等の利字は何々、二等のは何々と等別して並べあるが故に、熟練せる職工は、之を拾ひ上ぐること非常に速し。

文選工既に所要の文字を拾ひ了れば、之を植字工に渡す。植字工は原稿と對照して、込物(字間を明くる爲に其の間に組込むもの)、振假名等を用意し、注文通りに枠に組む。組むに最も骨の折るゝは、表の類、次はルビ(七號ふり假名)の多きものとす。

活字は地金が鉛なる故に、一萬枚も印刷すれば、字面磨滅して不鮮明となる。此の磨滅を防ぎ、且多數の

停滯
紙型鉛版
輓近

活字を一書の印刷に停滯せしめざる目的にて、紙型鉛版といふもの輓近發明せられ、今盛に行はる。

一七　漢字の構造

漢字の構造を見れば、其の創製時代の社會狀態及び時代の觀念等をも知るべきこと多く、興味盡きざるものなり。貨、寶、賣、買等の文字が貝に從へるを見れば、貝を通貨とせし事を知るべし。策、算、答、筯等の文字が竹に從へるは、竹の應用の弘く行はれしを證するが如し。引、弛、張、强、弱といふ觀念の弓に因める、約、紊、細、

容姿
通患
暴露

絶、結といふ觀念の糸に因めるが如きも面白からずや。

今女扁の文字を檢するに、姓、嫡の字の女扁なるは、家族の血統が母により確められるればなるべし。始の文字も之に因めるか。好、妙、妥、姸等は女子の容姿と德行との麗しき方面より出でたるなるべく、婉、嬌、媚の如きは、艶麗愛すべき裏面に、女子の惡しき性質あるをも連想せしならん。妖、妄、奸、妬の惡德を擧げて女扁に歸せしめたるは、支那當時の女子の通患を暴露せしものなるべけれど、東西古今、女子の男子に比して、

かゝる惡性を有し易きは耻づべき事ならずや。

榊、躾、噺、峠、裃、働等は支那製の文字にあらず。日本にて作りしものなり。祭祀を重んずる國風より榊の字を製し、禮儀を貴べる習慣の躾の字を必要ならしめしが如きも、自ら我が國民の性情をあらはせるものと謂ふべし。

一八　元　旦

徳富蘆花

早起、若水を汲んで顏を洗ひ、雜煮を祝ひ終り、櫻山に登りて富士を望むに、雲に潛んで見えず。山を下りて逗子(一)の村を過ぐれば、人家の椿に三四十輪の花あり。椿に隣れる梅樹の槎枒たるに、點々として蝴蝶の羽のかゝれる如きを諦視すれば、梅花の既に發けるなり。

日あたりよき所には、稀に菫花、蒲公英の一朶、両朶を見る。舟にはおの〳〵旗を樹て、松を飾りたり。村の子女晴着して羽子をつき、紙鳶を飛ばすなど、淋しきながらも、さすがに正月なり。

—自然と人生—

(一)横須賀、鎌倉間の一驛。華族富豪等の別莊多し。

槎枒　諦視

かまけ

一九　新年狀

さしのぼる初日新くもりなき手の光を御一統様御掛けのごとく迎へ遊ばされいつくかずかず御めでたく祝ひ申上げ私方にも皆こつがなく手重れいまゝ憚ながら御心安う思し召たまはり度い常はお前にかまけ居ながら成人の御様子も久しう拜し奉らず一入ゆかしう存じ申せて此の春は以ての通り早々にて存じ候に付親子暮より関西へ旅行後留主中いとど幸しげく

歸宅までは何も出来かねはんかく存じまゝ失礼ながら文にて愛のみ聞え上げ申候御一統様へよろしく御伝へ下され度弥生子様ちく出遊に出越し下されいやう富子様上げ申居お年玉のしるしまでに出目にかけ申し候

かしこ

右の挨拶

門の小松の千代かけてめでたき年の初の御玉づさ忝う拜しり。御一統様ますく御機嫌よう御年迎へ遊ばされ、重ねぐめでたく祝ひ上げり。御両

親様關西へ御旅行と相伺ひ候まゝ、年の内に御見舞かたゞ〳〵御たづね申上度と存候ひしが、家の事に取紛れ、今に失禮致居候。御宅様にては、富子様日に増し御美しう御成長遊ばされ候御様子相伺ひ、何よりの御事と存上げり〳〵。彌生も今年は中町の學校へ入學の順になりをり候まゝ、何かにつけよろしく御世話さま願上げり〳〵。さ候へば御詞にあまえ、近きうちに彌生をお邪魔さまに上らせ申すべく候。申しおくれ候へどもお珍しき上方の若緑、態〻御使にてお年玉に頂戴致し、厚く御禮申上候。何もく〳〵、御目もじの上御

さ候へは

首肯

禮聞え上ぐべく候。先づは御あいさつのみ。めでたく、かしこ。

二〇　新年の海

寒川鼠骨

川口の乗船切符賣場へ行く。横須賀行汽船乗場と書いた幟が立つてゐる。其の幟を目標に行つて見ると、其處は納屋で、蓆包の荷物などが山のやうに積んである。横の方に一人の男が、机を前に不景氣さうに構へてゐる。「横須賀行の切符賣場は此處ですか」と聞くと、男はウンと首肯する。幾らかと聞くと、二十一錢

といふ。航程幾何かは知らぬが、二十一錢とはちよつと廉いやうな氣がする。中等を奮發しようと思つて、幾らかと聞くと、中等も下等と同じ事だといふ。切符を買つて、乘場は何處かと聞くと、男は頤でそれ其處に居るといふから、頤の動いた方を見ると、何の事だ、すぐ其の前の川に纜（もや）つてゐる小蒸氣であつた。恐らく二十噸を出まいと思はれる程小さなので、ちやうど牛がうづくまつてゐる位しかない。成程、下等、中等も同じわけである。

纜ふ

棧橋から直ちに甲板へ跳り上る。否甲板ではない屋根の上だ。甲板の方には荷物が一ぱいに積んであるので、坐る餘地は無い。余に續いて十數名の水兵が、余と同じやうにドヤ〳〵と屋根へ跳り上る。それから續く乘客がやつて來るが、皆下の室へ潜り込んでしまふ。十分ばかりも待つ。天氣はいゝが風が寒い。水兵は背かけを立てて首を埋めてゐる。其の中の一人が俄に立つて、

「おい〳〵、出さんか〳〵」。

と呼ぶ。すると屋根の下から、

「いま出すよう」。

初荷

一喝

と答へる。シュッ〳〵と船の腹から蒸氣を吐出す。何やら機械の廻る音が聞える。此の時陸上をキリン・ビールの初荷が通る。水兵が總立ちになつてそれを見る。船はガタ〳〵と動き出す。

「みんな、しやがんだ〳〵。頭を〳〵」。

と耳のそばで怒鳴る者があるので驚いて見ると、紺の竪襟金釦の脊廣に、麻裏草履を穿いて、獨逸帽を被り、埃除の大眼鏡をかけた、色の黑い、中高顏の、しかも鼻の高く尖つた船長だ。鼻が尖つて、眼鏡が大きいから、まるで河童のやうだ。此の河童の一喝を喰つた水兵は、おとなしく坐る。船は橋の下を潛つて下流へ向ふ。其のあたりは上る舟、下る舟、纜つてゐる舟、狹い川面を望み見ると、舟で埋まつて居るやうに見える。余が船長は余の傍に立ち、前面を見ては、天窓から機關室へ大聲で號令をかける。其の令下に船は自由自在に、幾多の障害物を乘越して川を過ぎ、港へ出る。急に風が强く顏に當る。鼻と耳とがちぎれるやうだ。たまらないから、襟卷に鼻まで隱し、煙突を風除に其の後に陣取る。

港內は川とは其の趣を異にして、ありとある船、一

つも人影がなく、たゞ眠れるやうに靜に纜つてゐる。和船には、どれもこれも笹と幟を立て、汽船には何れも國旗を高くあげてある。幾千となき白鷗が、低く彼處此處の船の周圍に群飛んでゐる。米國國旗を掲げた山の如き黑船が一隻纜つてゐる。帆柱の上あたりに、二羽の鳶が高く舞うてゐる。いゝ新年の海だ。

港を出ると、殆ど一つの障害物も無い。道理で先から屋根の下で號令を下してゐた河童君が、何時の間にやら下へ潛り込んでしまつてゐる。左の方は房州の山々が淡くうねつてゐる。右手は半島を二分してゐる嶺が近くに見える。松の茂つた山、其の松の幹の赤いのも見える。屏風のやうに赭く切れてゐる山、上が禿げて中腹から雜木になり、麓に四五軒藁屋のある山、三角な山、牛の脊のやうな山、人の顏のやうな山、いろ〳〵見えては、後に隱れて行く。ふとそれらの山の上を注意してゐると、富士が見える、實に偉大だ。飽迄も見まもつてゐるが、後にもならず、隱れもせず、動きもせぬ。愈見つめてゐると、自分の方へ近づいて來るやうに思はれる。尙見つめてゐると、頭の上へ落ちて來るやうに思はれる。それが暫くすると、やゝ小さ

く見える。さう思ふと、今度は手の平へ乘りさうにも思ふ。尙愈〻見てゐる內に、其の富士の左手の方に、小さな卵形の薄雲が出て來る。ゆる〳〵と富士の巓さして進んで行きつゝある。今に富士にかゝると思つてゐる內に、其の雲は次第〳〵に薄く廣がつて、富士へ行かない先に、空の色に溶けて無くなつてしまつた。忽ち耳元でピューッと鳴る。水兵等が皆立つ。下の室から首を突出す者もある。甲板上の荷物の上へ出る者もある。河童の船長も屋根の上へやつて來る。自分も立つ。船ははや横須賀へ着いたのであつた。

創意（おもひつき。）

自修文

二一　七福神

——作文講話及文範——

惠比須、大黑、毘沙門、辨天、壽老人、福祿壽、布袋を七福神と稱へて、一幅の畫に描くこと、足利時代に始りしことと思はるれども、何人の創意に出でたるかを知らず。七福神が寶船に乘りたる繪を正月二日の夜に枕の下に敷く事も、足利時代よりのならはしなり。

さて七福神の中、惠比須のみは日本の狩衣姿なり。釣竿を肩にし鯛を抱へたる、漁業につとめ、魚類を常食とする日本人の福神として相應はし。商家にては、每年十月之を祭りて惠比壽講といふ。

大黑はもと印度の神なり。臺所を掌るといへば、食物には緣あるべし。打出の小槌を手にして俵を蹈まへたるは、其の姿の日本化したるなるべし。之を大國主神と混同せるは、神佛混淆の結果なり。

毘沙門は佛教守護の四天王(一)の一、武勇の神。辨天は七福神中唯一の女神にして、もとは辯舌の神なりしが、辨財天といふより、後には財寶の神として、あがめられしなるべし。毘沙門、辨天ともに、大黑と同じく其の本國は印度なり。

壽老人、福祿壽、布袋三神の國籍は支那なり。壽老人は其の名の示す如く、長壽の神として喜ばれたるなるべく。福祿壽は壽の上に福と祿とを持ちたれば尙更なり。布袋のみは支那の歷史上に現存したる人物にて、或寺の僧なりき。小兒を愛して常に之と戲れたりといへば、兒福者の意味もあるべし。

衣食財寶に不自由なく、無病息災に子孫繁昌するは、人生生活として最大の幸福なり。されば七福神をあがめて、此の幸福にあやからんとせし古代人の思想も了解せらるべし。さて又日本、支那、印度と國籍の三つに分れたるも、當時の日本文化の有樣を知るに足るべきなり。

(一)梵天帝釋の武將で四人あり。持國天王、廣目天王、增長天王、多聞天王。(毘沙門天)。

二二　甲冑堂

奥州白石(しろいし)の城下より一里半南に、齋川といふ驛あり。此の齋川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州

(一)磐城國刈田郡。今は白石町。

狐梟のすみか

筋近年の凶作に、此の寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も住まず、空寺となり、本尊だに何方へ取納めしにや、寺には見えず。庭は草深く、誠に狐、梟のすみかといふも餘あり。此の寺に又一つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の書付には故將堂とあり。大いさ僅かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此の小堂の破損はいふまでもなし。やう〳〵に緣にあがり見るに、内に佛とても無く、只婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。いかなる人の像にかと

(二)醫者、兼文學者。文化二年(一八〇五)歿。

尋ぬるに、佐藤繼信、忠信の妻なりとかや。

これ今より百餘年前、橘南谿(二)が東遊記に記せる所なり。

繼信、忠信は源義經の家來なり。平家の盛なりし頃、義經は奥州に下りて身を藤原秀衡に寄せしが、兄頼朝の兵を擧ぐる由聞きて、急ぎて鎌倉へ馳參じぬ。繼信兄弟も從ひ行きしに、其の後義經京都へ攻上り、平家を追落して武功著しかりしかども、頼朝と不和になりて、再び奥州さして落延びたり。然るに、繼信は屋島の合戰に能登守教經の矢に中りて斃れ、忠信も京

形見ばかり歸る

都にて討れしかば、同じく從ひ出でたりし龜井、片岡等の人々は無事にて歸國せしに、繼信兄弟は形見ばかり歸りぬ。母は悲みに堪へず、せめて二人の中の一人にても歸りたらばと、悲歎の涙やむ時なし。兄弟の妻は母の心根を察し、やがて夫の甲冑を取出し、勇ましげに出立ちて、母の前に跪き、「兄弟唯今凱陣いたし候ひぬ」と言ひしかば、母も二人の嫁の志を喜びて、涙ををさめてほゝ笑みたりとぞ。

繼信の主と頼みし義經に忠なりしは、屋島の戰に敎經の矢面に立ちて、主の命に代りしにても知るべ

痛手

し。義經は痛手を負へる繼信をいたはりて、「一所にとてこそ契りしに、先立つることの悲しさよ。思ひ置く事あらば言へかし」といへば、繼信苦しげなる息の下に、「敵の矢に中りて主君の命に代るは弓矢取る身の習、更に恨にあらず。只思ふ所は故郷に遺し置きし老母の身の上なり。弟なる忠信をば行末かけて召使ひ給へ」とばかり言ひて、やがて息絶えたり。今はの一言に母への孝心、弟への友愛、之を聞ける兵も皆鎧の袖を絞りぬ。弟の忠信が吉野の山に蹈止りて、多勢の敵と戰ひ、義經を落しやりし武勇義烈は、兄にも劣らず

といふべし。妻なる二人の婦人が、深き悲みを押包みて、母を慰めんとせし健げさ、をゝしさ、うち揃ひての忠孝、世にもめでたき例ならずや。時の人の其の姿を木像に刻みて、此の堂を建てしも、故あるかな。こゝに詣でし俳人の句に、

軍(三)めく二人の嫁や花あやめ

卯(四)の花や縅毛ゆゝし女武者

明治八年此の小堂火災に罹り、像もともに燒失せたりとぞ。

——國定高等小學讀本——

(三)桃隣の句。
(四)小華山人の句。

殘骸
化學的組織

二三　石炭の利用

石炭が古代植物の殘骸であることを知らぬ人はあるまい。すべて生物の化學的組織が如何に複雜であるかを考へる時は、石炭の化學的組織も亦如何に複雜であるか、自ら明瞭となるであらう。今日の學問では、まだ十分に其の化學的組織は分つて居らぬ。普通には炭素といふ元素からなつて居ると見られて居るが、實は水素も少量ながら含まれて居て、石炭の主要な元素となつて居るのである。

石炭はかく、主として炭素及び水素から成立つて

居るのであるから、其の燃えるのは明らかなことで、燃料として、工業上其の他に重要な物であることは、言ふまでも無い。

石炭を蒸燒にすると、揮發性の種々な物を放出して、跡にコークスといふ貴重な燃料が殘る。これ亦工業上大切なものである。

揮發性

さて此の揮發性の放出物を冷すと、アムモニヤ液とコールタールとが取れる。アムモニヤ液は肥料の原料と成るものである。コールタールはちよつと見ると、汚い臭い眞黑な物で、こんな物が何になるかと

思ふ樣なものであるが、これから種々美しい染料が製造せられるといふことは、實に不思議である。衣服を染める種々の染料が、殆ど數限りもなくこれから製造されるのである。

更に大切なのは、コールタールから各種の藥が製造し得られることである。中にも石炭酸は殺菌劑として大切なもので、之が發見されてから、人命を救つたことは幾百萬といふ數であらう。アンチピリンも、サリチル酸も皆此のコールタールの製品で、戰爭で暴威を奮つて居る種々な强烈な爆藥も、また多くは

爆藥

コールタールの製品である。曾ては無用なものとして棄てられ、臭い汚いとて其の近邊の者から苦情の絶えなかつたコールタールが、今日甚だ有要な工業原料として取扱はれるやうになつたのは、全く科學の進歩のお蔭である。

揮發性の放出物中から、アムモニヤ液やコールタールを除いたものが、所謂石炭瓦斯で、是亦燃料として、燈用として、大切なものである。

二四　郷里の祖母へ

樋口一葉

今朝は風はげしくて北向の部屋は寒すら明けがたきやうに御座いまして山おろしはげしき御地たいかばかりかと父母もいと御案じ申上さ候居い

御祖母様ふは此の寒さに御障もあらせられずや案ぜに伯父様より御文たまはりし節相変らず御健にて伯母様も御及びなきほど御内の御用何くれと遊ばさるる由承り父母始め私ども、嬉しう存上げ花の頃にも相成はば

見上げ御地へ御迎に參り御誘ひ申して上野向島の人出御見にかくるこゝも叶ふべしと一同勇み居い今十日程にて寒は明けゝれども餘寒はなほまさるものゝ御身御大切に御風呂一給はぬやうくれも祈り上いつゝもなき出來にはゝれども私こゝろゝい綿入小包郵便にて御送り申い習古呂の下にお重ねやされ度い母よりは例のカステラ差上いづれ二三日中には着き申すべくい

當地にては誰も変ることなくい父は昨年おなつまりて昇進致くい御喜ばやされ度いされば御年始状差出い節申上ぐべかりしをつい漏し

たれば其方よりの申附に御座いどな大様にも宜しく御申上げやされ度いかしこ

―通俗書簡文―

自修文

二五　世の中で一番怖いもの

福澤諭吉

凡そ世の中で何が怖いと云つても、借金位怖いものはありません。他人に對して、金錢の不義理は相濟まぬ事と決定すれば、借金は益〻怖くなります。私どもの兄弟姉妹は、

不義理　ぎりを缺くこと。

幼少の時から貧乏の味を嘗盡して、母の苦勞をなさつた様子は、生涯忘れられません。貧乏士族の衣食住、其の艱難の中に、母の感化を受けた事が數々あります。一例を申せば、私が十三四歳の時、母にいひ付けられて、金子返濟の使をした事があります其の次第柄はかういふのです。

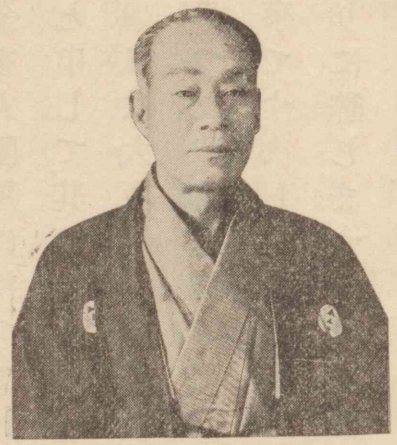
天保七年大阪で私どもが父の不幸に遭つて、故郷の中(一)津に歸りました時、家の普請をするとかいふに、勝手向は勿論不如意ですから、人の世話で賴母子講を拵へて、一口金二朱づつで、何両とやら纒つた金が出來て、一時の用を辨じました。それからは毎年幾度か、講中が二朱宛の金を持寄り、鬮引して、滿座に至つて皆濟となる仕組でありますが、大家の人は二朱ばかりの金の爲に、幾年もこんな事

(一)豐前國下毛郡。

賴母子講　多くの人が或期間一定の金額を出し合ひくじびきで當籤したる者が其の總額をとる金の融通法。又無盡講といふ。

滿座　無盡講のしまひになること。

に關係して居るのは面倒だといふ所から、一時二朱の掛金を出した儘で、手を引くものがあります。これを掛棄といひます。



福澤諭吉

私の家の賴母子に、大阪屋五郎兵衛といふ廻船屋が、一口二朱を掛棄にしたさうです。勿論私が三四歳の頃の事で、何も知りませんでしたが、十三四歳の時、或日母が私に申すに、「お前は何も知らぬ事だが、十年前にかう〳〵いふ事があつて、大阪屋が掛棄にして、福澤の家は大阪屋に金二朱を貰つたやうなものだ。誠に氣が濟まん。武家が町人から金を惠ま

融通（ゆうづう）　金のつがふ。

れて、それを唯貰うて默つて居ることは出來ない。疾うから返したい〳〵と思うては居たが、どうもさう行かなかつた。やつと今年は少し融通がついたから、此の二朱のお金を大阪屋に持つて行つて、厚く禮を述べて返して來い」。と申して、其の金を紙に包んで渡されました。

私は大阪屋へ參つて、金の包を出すと、先方では意外に思つたか、「御返濟などとは、却つて痛み入ります。最早古い事です。決してそんな御心配には及びません。」といつて、頻りに辭します。私は母の言ふ事を聞いて居るから、是非渡さねばならぬと、互に押返して、口喧嘩のやうに爭つて、金を置いて歸つた事があります。今ははや五十二三年も過ぎて、昔昔の事でありますが、其の時母にいひ付けられた

白刃（はくじん）　さやから拔いたかたな。ぬきみ。

口上も、先方の大阪屋の事も、ちやんと記憶に存して忘れません。年月日は覺えませんが、何でも朝の事でした。豐前中津、下小路の西南の角屋敷で、其の時主人五郎兵衛は留守で、弟の源七に金を渡したと云ふ事まで覺えて居ます。

こんな事が、幼少の時から私の腦中に遺つて居ますから、金錢の事に就いては、どうしても、大膽な、横着な擧動は出來ません。私は借金に就いては、大の臆病者で、少しも勇氣がありません。人に金を借用して、其の催促に逢うて返す事が出來ないと云ふ時の心配は、恰も白刃を以て追ひかけられるやうな心地がするだらうと思ひます。

——福翁自傳——

二六　努力と奮闘と嗜好

幸田露伴

奮闘

自己の最良を盡す

人間の所爲を種々に分類すれば、隨分多數に分類し得る。そして其の所爲の價値に幾千と無く階級もあらうが、努力といふことは、確かに其の高貴な部分に屬するものである。奮闘といふ言葉は、努力と稍近似の意味を表して居るが、これは假想の敵がある樣な場合に適當するもので、努力は我が敵の有無に拘らず、自己の最良を盡して、而して或事に努勵する意味で、奮闘といふ意味が有する感情、意義よりは高大

公正

嗜好

並行線的
同一線的

で、公正で、明白で、人間の眞面目な意義を發揮して居る。元來一切の世界の文明は、此の努力の二字に根ざして、そこから芽を發し、枝をつけ、葉を生じ、花を開くのであると言はねばならぬ。

然し努力に比して、其の相手の樣に見ゆるものがある。それは嗜好、即ち好んで爲すといふことである。努力は厭な事をも忍んで爲し、苦しい思にも堪へて、勞に服し、事に當るといふ意味であるが、嗜好といふ場合には、苦しい事も打忘れ、厭ふといふ感情も全く無くて、即ち意志と感情とが並行線的、若しくは同一

線的に働いて居る場合をいふのである。努力はそれと稍違つた意味を有し、意志と感情とが相忤し、戻つて居る場合でも、意識の火を燃立たせて、感情の水に負けぬ様に爲し、而して熱して已まぬのをいふ。

或人が或事に從事し、而して其の人が、我知らず自己の全力を其處に沒して事に當るといふ場合、それは努力といふよりは、好んで爲すと言つた方が適當である。其處で世界の文明は努力から生じて居るか、好んで之を爲す處から生じて居るかと言へば、努力から生じて居る如く見える場合も、嗜好から生じて

俊秀

徳澤

批評

(一) Palissy. 佛國の人。各種の色彩模様を陶器に應用す。後獄死す。(西暦一五一〇—一五八九)

居るが如く見える場合もある。例へば、文明の恩人、即ち各時代の俊秀な人物が、或事業の爲に働いて、其の徳澤を後世に遺した場合を考へて見るに、努力の結果の如く見える場合もあり、又好んで爲した結果の如く見える場合もある。これは人々の觀察、解釋、批評の仕方に因つて何方にも取れるが、正當に解釋して見たならば、好んで爲す場合にも、努力が伴なはぬ時は其の進行を廢絶せざるを得ない。然らずとするも、偉大なる結果を期することは出來ない。パリッシーの陶器製造に於けるも、コロンブスの新地發見に於

けるも、皆さうである。如何に好んで爲すといつても、例へば有福の人が園藝に從事する場合に就いても、或時は確かにそれは苦痛を感ぜしめる。即ち手數、緻密な觀察、時間的不規律な勞動に服する等の種々の場合に、努力によらなければ中途で止むの狀態に立至る事もまゝある道理で、換言すれば、好んで爲すといつても、其の間に好まざる事情が生ずるのは、人生にあり勝な事實である。其の好ましからぬ場合が生じた時に、自己の感情に打克ち、其の目的の遂行を專らにするのが即ち努力である。

――努力論――

三伏

漲る

二七　朗詠

春

東岸西岸の柳、遲速同じからず、
南枝北枝の梅、開落已に異なり。

夏

池冷にして、水に三伏の夏なく、
松高うして、風に一聲の秋あり。

秋

秋水漲り來りて、船の去ること速く、

夜雲収り盡きて、月の行くこと遲し。

冬

寒流月を帶びて、澄めること鏡の如く、
夕吹霜に和して、利きこと刀に似たり。

夕吹

旅

孤館にやどる時、風は雨を帶び、
遠帆のかへる處、水は雲に連る。

春秋富む

祝

長生殿の裏には、春秋富み、
不老門の前には、日月遲し。

宗とし斗とす
慷慨家
齷齪

二八　梁川星巖の妻

下田歌子

梁川星巖は、德川末期に於ける有名な詩人で、文は山陽を宗とし、詩は星巖を斗とすと並び稱せられた人であり、且なか〳〵の慷慨家でありました。其の妻は紅蘭とて、亦一種の女丈夫でありました。紅蘭は美作國の豪家長谷川氏の女で、幼少の時から、男勝りといはれて居たのであります。何事をするにも勝氣で、はき〳〵して、小さな事に齷齪致しません。十歳の時には、最早ちよつとした詩作位は出來たと申します。

婦工

黄道吉日

緣女

(一)宋の周伯弼が唐代の詩を七言絶句、七言律詩、五言律詩の三體に分類して編輯せしもの。

當時には珍しい學問のある女子で、そして婦工も一通りは心得て居ましたので、星巖は此こそ望む所の良妻であるとて、自ら先方へ結婚を申し込みました。紅蘭の家でも、星巖といへば名高い學者であるから、早速其の相談は纏つて、黄道吉日を選んで、めでたく輿入を致しました。所が、いざ結婚式を擧げようといふ時になつて、星巖は思ひ出した樣に緣女に對ひ、「今からちよつと旅行して、三月許のうちに歸つて來るから、其迄に三體詩(一)を暗記して置け。」と言つて、人々の止めるのも聽かず、飄然として出でゆきました。詩人

奇行

肝心

素養

や歌詠(うたよみ)には奇行が多いとは聞及んで居たものゝ、此は又餘りに突飛な行だと、人々は大いに驚きました。

併し肝心の緣女は何とも思はぬ樣子で、其の日からして留守を守り、裁縫や家事の暇毎に、夫から申しつかつた三體詩を出して來ては、熱心に暗記して居りました。もとより記憶力も強く、漢學の素養もある所から、さほど困難も感じませんで、間もなくそれを暗記してしまつて、今は心安しと、夫の歸る日を待つて居りました。

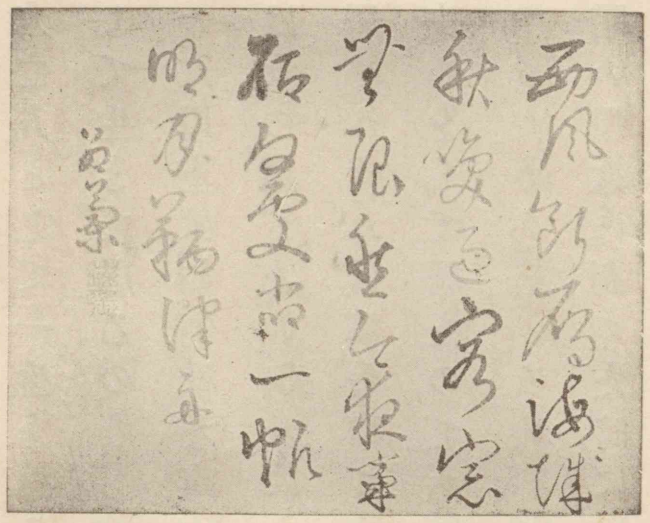
所が星巖は約束の三月を經ても歸つて參りませ

暢氣な

ん。何處に何をして居るとも申して參りませんので、緣女はとにかく、一家親類のものは、どうしたことであらうと案じ暮しましたが、其の内には歸るだらうと心賴みして、待ちに待暮す間に、早く一年も過ぎ、二年も過ぎたのでありますす。何ほど待つても、風の便だにありません。如何に暢氣な人にした所で、結婚前の妻を置いて、二年も三年も旅に出て居る者はあるまい。これは必ず途中でどうかなつたのであらう。若しさも無くて、歸るのを忘れて居る樣な男ならば、連添ふ妻は誠に賴もしげない事である。どの道見込が無

嫁期

西風斷鴈海城秋。
喚過客窓無限愁。
今夜藁砧何處宿。
一帆明月鞆津舟。
紅蘭



紅蘭筆蹟（萩野由之氏藏）

いから、綺麗に梁川家から暇を取つて還るがよい。まだ婚禮前で幸であつた。嫁期の過ぎぬ間に、他に良緣を求めねばならぬと、父母迄も切りに家に還ることを勸める樣になつたのであります。

けれども當人は此の忠告には反對で、斷然之を斥けました。其の心の中には、果して夫星巖は途中

で死んだのかも知れぬ。死んだとすれば、自分は最早未亡人として一生を送るべきものである。若し幸にして生きて居るのならば、一旦緣あつて此の家に嫁いだ以上は、如何樣な事があつても、自ら出で去るのは女の道でない。何れにしても、自分一人が覺悟して居さへすれば濟む事であると、かやうに考へて、堅い決心をして居たのであります。併し何と申しましても、まだうら若い女の事でありますから、唯一人ほの暗い燈火に對つた時には、さすがに夫の上を案じ、身の行末を思ひ佗びて、心に泣いた事もありました。

うら若い

かくて又一年を經ました。花は咲いて、花は散つて又も青葉の期となりました。濕り勝な梅雨の空に不如歸と鳴く杜鵑の聲は聞えても、夫の便は更にありません。父母は我が女の衰へ行く姿を見て、非常に氣を揉みました。されども當人の心は鐵石の如く、頑として少しも動きません。

かくてちやうど三年目の秋の頃であります。今はなか〳〵憂さにも淋しさにも馴れし身の、待つほど過ぎては待つとしも無く、待たずともあらぬ夕暮に、ゆくりなくも星巖は飄然と歸つて參りました。詩人、

墨客

墨客の常として一度旅に親しみますると、彼處の花、此處の月と、それからそれへと憧憬れて、つい歳月の流るゝにも心づかず、三歳の月日を旅の空に過したのでありますそれでも出る時に申しつけた事は忘れなかつたものと見えて、家に歸ると直に、まづ「三體詩は暗記したか」と問ひました。妻は夫の問に應じて、すら〳〵と答へましたので、星巖も大いに喜び、茲に始めて、結婚の式を擧げましたのであります。此の一條の話は、或は星巖程の人物でありますから、非常に堅忍不拔の志操を持つて居る妻ならでは持つまいと思つて、殊更に試したのであらうと云ふ人もありますそうかも知れませんが、試驗にしては、餘りに長い試驗ではありませんか。又或說には、星巖は結婚を濟ませて、直ちに行つたので、妻だけには得心させて出立したのだとも申します。

憧憬る

一條の話

堅忍不拔

—日本の女性—

二九　淀　川

福井久藏

底ひ知られぬ琵琶の湖は、瀨田邊より蹙まりて一條の江流と爲り、瀉ぎて宇治に落ち、淀川の上流となる。淀川は山城の南部を貫流し、木津、桂の諸川を合せ

高瀬舟

形勝の地

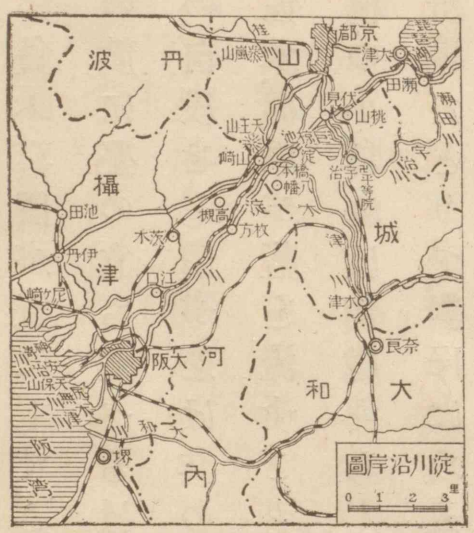
保障

歌枕

て、西南攝河の平野を潤し、下流分れて大阪灣に注ぐ。

本流は支流よりも短くして、其の長さ二十里に達せざれども、水量多くして、川口より伏見のわたりまでは、常に汽船の往來絶えず。また高瀬舟は遠く木津、大井、賀茂の諸川に溯る。げに畿内の大川たり。灌漑、漕運の便大なるのみならず、形勝の地を過ぎ、舊くは都の保障ともなれりしを以て、沿岸は歴史上の事實に富み、歌枕に入れる所少からず。

まづ宇治、瀬田の間は、両岸の山脈相迫り、或は激水其の脚を洗ひて、白沫飛散する「米かし」の奇となり、或は両岸の巨嵓相挾みて、一跳すべき「獅子飛」の絶となり、右に折れ、左に廻り、凄じき勢を以つて崎嶇たる峽間を飛流奔下す。されば、都近きわたりなりといへども、山野を棲家とせる獵夫、薪とる樵夫ならでは、恐ろしきものにいひなして、往來するものいと稀なり。



宇治は茶の産地にして螢の名所なり。都の巽に當

翠巒

(一)應神天皇の皇子。仁德天皇の御弟。

(二)もと源融の別莊。後藤原道長之を買ひ、其の子頼通永承七年(一一七一二)寺とす。

(三)源頼政。

(四)「散りはつる山吹のせに行く春の、花に棹さす宇治の川をさ。」(新拾遺集、西園寺入道)

りて、昔稚郎子の皇位を避け給ひし地。翠巒に對し、清流に臨む。近く聳ゆるは、「世をうぢ山。」と謠ひし人の名に負ふ喜撰が嶽にして、これに對して朝日山あり。其の麓に喪の立ち並べるは、名もしるき平等院。源三位の自殺せし扇が芝は、其の樓門内にあり。元暦の昔、佐佐木、梶原が藍を流すごとき此の川に馬乘入れたる橘の小島、崎は何處ならん。熊谷父子が目もくるめく桁をたどりて、對岸に攻入りし橋は今碑の立てるわたりか。歌に詠める山吹の淵も瀬も、變り行く世なれば、今知り難し。こゝより西北に流るゝこと五六十町、

(五)明治元年。

盡頭

伯仲す

水勢漸く緩にして、高瀬舟の繁く往來するは伏見なり。戊辰の役、官軍の德川勢と衝突せし地にて、右岸に蜿蜒たるは、東山三十六峯の盡頭たり。そのかみ千生瓢簞の輝きし桃山城址はこゝにあるなり。觀月橋頭より眺むれば、風景描くが如く、左岸を離れて巨椋の池あり。形鏡の如く、大いさ箱根の蘆湖と伯仲せり。蓮多く、蓴菜産すといふ。もと小倉の入江と稱へ、宇治川これに注ぎたりしを、豐太閤の、池を横ぎりて大和街道を開かれたるより、かくはなれりとかや。

伏見より西南に流るゝこと五十町、巨椋の瀉水を

受け、大井、賀茂の分流せる桂川を合せて、水勢紆餘せる地を淀といふ。市街川を挾みて、城址左岸にあり。名もしるき淀の川瀨の水車は、廢城の後全く斷絶したれど、そこかしこの田井に引ける水車少からず。川の汀には處々菰草の叢生せるを以て、古歌には、「眞菰かる淀。」と續けたる多し。(六)

平安京の西面の關門は山崎なり。山崎は淀を距ることおよそ一里、攝津との境に位す。山岳南北より迫りて澱江を壓し、頗る形勝の地たり。されば古來こゝを爭ひしこと幾度なるを知らず。秀吉の光秀を亡せ

(六)「まこもかる淀の澤水深けれど、底までけり月の影はすみ」(新古今集、大江匡房)「あやめ草尋ねてぞ引くまこもかる、淀の渡の深きぬまで。」(榮花物語)

山勢雄偉

しも、まづこゝなる天王山を占めしに由るといふ。山の中腹に寶寺あり、寶積寺と稱す。山勢雄偉にして松柏欝葱たり。麓に近く櫻井あり、いはゆる楠公父子訣別の處。石清水八幡宮は對岸なる男山鳩が峯に鎭ります。いと尊き神におはしまして、歷代朝廷の崇敬も淺からず。今は官幣大社とぞ仰がれ給ふ。

淀川は橋本に至りて木津川と合し、江口にて一枝を分つ。これを神崎川といひ、尼が崎の浦に注ぐ。本流は大阪に至り、安治、木津、尻無の三川となりて海に入る。安治川は河村瑞賢安治の開鑿にかゝる。其の川口

に一岡阜あり、天保山といふ。天保二年浚渫せし土砂をおきし跡にて、今白色不動光の燈臺を設けて、船舶の航行に便せり。

三〇　衣服と精神

衣服はもと寒暑に對して、身體を保護するが爲に作られたるものなり。然るに時を經るに隨ひて、衣服は更に他の目的にも用ひらるゝに至れり。中にも衣服が一種の裝飾の具とせられて、男女老幼によりて其の色合、縞柄などを異にし、流行を追ひて互に其の

縞柄

美を競ふは、誰もよく知る所なるべし。されども其の最も著しきは、衣服が人の精神をあらはす手段となり、これとともに交際上に必要なる禮儀の用具となれることとこれなり。

人の生活には喜あり、悲あり、家居平常の寛かなる時あり、儀式應對などにて改る時あり。これに應じて衣服にも、常服、晴衣、禮服など樣々のもの出で來れり。家に居てくつろげる時は、不斷着のまゝなるが氣樂にて、且却つて相應せり。之に反して、訪問の客に接し、或は他人の家を訪づるゝ時は、着流しのまゝにては

着流し

白襟紋附

派手

取締なく、且禮を失ふことあり。殊に嚴しき儀式の場所などに臨むには、羽織袴、白襟紋附など相應にして、これがため心も自ら引締り、獨り本人のみならず、これに對する人の調子も、自然に改るべし。

かくの如く、衣服は場所によりてそれ〴〵の變りあるのみならず、人の身分年齢に應じても異なり。されど世間には、其の身分年齢に副はざる服裝をなせる者少からざるが如し。身の程を忘れて華美なるあり、年にも耻ぢず派手なるあり。これらはいづれも品下りて、心の程も見ゆるやうなり。品格は衣服の品質

折目正し

洗濯

秩序

によるにあらず。皺のよれる絹物よりも、折目正しき木綿物を着たる方ゆかしきものなり。されば婦人自らは勿論、其の世話する男子の衣服までもよく見はからひ、場合に應じて相當なる樣をなさしむるやう心掛くべし。晴衣はもとより不斷着まで、毎夜疊み置きて、何時も折目正しくなし置くべし。また不斷の物はしば〳〵洗濯すべし。夏は殊に糊硬きものを主人に着せたるは、誠に家婦の見上げらるゝものなり。

男女ともに頭髪は亂れ、衣服は皺寄り、帶は解けて地に垂れかゝりたらん樣にては、心の秩序なきが見

透かされて、人に輕んぜらるべし。されば人々は常に衣服に注意し、一は精神に締をつけ、一は其の精神をあらはすに相應なる服裝をなすことを怠るべからず。

—女子新讀本—

趨勢　熨斗目

三一　織物の進歩

維新後西洋風俗の輸入は、上中下を通じて一種の流行となり、服制上に一大變革を及し、遂に洋服流行の趨勢を來し、舊來上下、熨斗目、紋附地に用ひし晒布の類は、頓に世の需要を失ひて、今は全く其の跡を絶つに至りぬ。而して洋服の流行は、これに附屬する品類の必要を生じ、肩掛、襟卷、蝙蝠傘、手巾の類より、室内に用ふるテーブル掛、窓掛、敷物の類に至るまで、我が機業社會に向ひて、其の供給を促し來れり。

これと同時に、洋式織機輸入の必要起り、かのジャカード・バッタンの如き新織機を用ふることとなりしが、明治二十一二年頃より、西陣をはじめ桐生、足利に於ては、專ら此の新織機を用ひて、輸出品を製造するに至りぬ。殊に京都府が時勢の變遷を早くも看破して、西陣の織工を佛國リオンに遣はし、ジャカード・

(一)上野國の絹織物の産地。
(二)
看破
(三)京都。
(四)Lyon. 佛國東部の都會。絹織物の産地。

新意匠

(五)東京府八王子市。

バッタンの新織機を輸入したるが如きは、其の功偉大なりとす。又西陣につぎて、機業上の改良に注意し、海外の需要に伴なうて精巧なる新意匠の物を織出したるは、桐生、足利なりとす。又八王子(五)の機業も維新後大いに進歩し、内地用の絹織物にては屈指の製産地となれり。また維新前まで紋附地に用ひられし京都名産の羽二重も、ハンカチーフ其の他西洋婦人の衣服地として、明治十七年始めて北米合衆國、佛蘭西、英吉利等へ輸出せしより、其の産額年々數千萬圓に達し、福井縣の如きは、羽二重の機業地として、其の名

手紡

織巧

大いに顯るゝに至れり。

我が邦の木綿織物の上に著しき影響を及したるは、洋絲の輸入にして、從來我が邦の綿絲は婦女の手紡に係るものなりしが故に、同一の人の手によりて作られたる品も、常に精粗不同を免れざりき。然るに、洋絲は其の太さ均一にして、之を區別するにも番號を以てするが故に、何番の絲と稱すれば、いづれの國の絲にても、其の太さに於ては、毫も異なること無し。しかのみならず、織工の勞力を減ずる便益あり。殊にかの瓦斯燒絲の如き織巧なる綿絲輸入せられてよ

り、爲に我が邦の織物は、俄然舊觀を一變し、更に從來無かりし所の織物を現出し、且大いに其の産額を增加したり。即ち愛知、岐阜の木綿縞、埼玉の二子織、紀州の綿フランネルの如き是なり。また足利の絹綿交織、丹後、桐生の觀光縮緬の如き織物出されて、其の絹帛に及せる影響も少からず。みな洋絲の輸入に由る結果ならざるはなし。こゝに於て、從來もてはやされし紋羽、眞岡木綿の類は、殆ど其の地位を失ふこととなれり。またこれ時勢の一變遷か。

—横井時冬、日本工業史による—

三二　家の紋

余は曾て羽織袴で西洋人の饗宴に招かれた時、主人から紋の由來を問ひたゞされた事がある。又先頃日本へ來た支那の提學使から、或處の宴會で、同じく紋の起源に就いて質問を受けた事がある。日本服の三つ紋、五つ紋は、外國人の目からは餘程不思議に見えるのであらう。

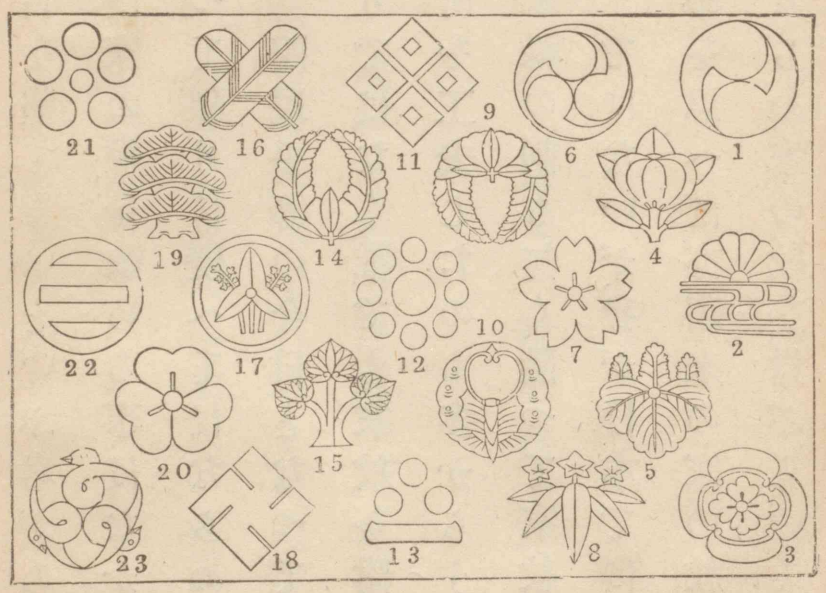
家の紋の起りは古いことでは無い。大凡鎌倉以後位の事であらうといふ先哲の說がある。元は旗、幕な

徽號

どに附けたのであるが、後には段々素袍、直垂、小袖などにも附けるやうになり、自ら其の家の徽號となり、後には冠婚葬祭の禮式の時には、必ず紋章の附いた着物を着ることになつた。今日では大禮服をはじめとして、通常禮服としては燕尾服を用ひ、通常服としてフロックコートを用ひる等、洋服を本として禮裝を定められたから、公の禮服には日本服を着る場合は無いが、民間の交際では、紋のある羽織又は小袖は、自ら禮服のやうになつて居る。

家紋の發達は武家以來のことであつて、武士道とともに益〻發達したに違ない。武家時代には其の家系を重んずる風が盛んであつたから、其の家紋によつて先祖の事蹟を忘れず、先祖傳來の家の

家系



1 二ツ巴
2 菊水
3 木瓜
4 橘
5 五七桐
6 三ツ巴
7 櫻
8 笹龍膽
9 下リ藤
10 備前蝶
11 四ツ目
12 九曜
13 三ツ星一字
14 上リ藤
15 立葵
16 ちがひ鷹
17 丸に澤瀉
18 角立萬字
19 三がい松
20 酸漿
21 星梅鉢
22 丸に二ツ引
23 結び三ツ雁金

名を墜すまいといふ考があつたのである。それ故昔は家の紋を改める事はなか〳〵やかましい事であつて、猥りに變へてはならぬ事になつて居つた。

四民平等の今日となつては、昔の武士の後裔ばかりではなく、誰でも家紋を附ける樣になり、新しく紋所を工夫したのも多からうと思ふ。今日の世の中は家祿の制も無く、隨つて家紋を重んずる心も昔のやうではないが、我が日本では家が社會の根本である事を思へば、亦舊來の家の紋所を貴ぶ心を忘れてはならぬ。家の紋を貴ぶといふことは、つまりは其の祖先を忘れぬといふことである。

堂侍

鞏穀の下

知悉

三三　稅所敦子君の棺の前に誄す

高崎正風

嗚呼稅所刀自逝きぬ。我が無二の友たりし掌侍正五位稅所敦子君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半生の行狀は、鹿兒島士民の普く知る所、其の後半生の名譽は、鞏穀の下にかくれなし。然れども前後に通じて、よくこれを知悉せるは、蓋し正風ならん。正風が歌に

垂んとす　高節　繼室　嬰兒

よりて始めて君と相見しは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が年十九の頃なりき。相見しは歌によると雖も、仰ぎ慕ひしは君が高節によれり。

君は正風と藩を同じくして京都に勤務せし稅所篤之氏が繼室となり、嬰兒を懷にして、不幸にも夫に訣れたり。嗚呼君は京都に生れ、京都に成長し、京都にて結婚せし優美艶麗なる婦人なりき。當時鹿兒島の風習たるや、同鄕人の外は他所者としてこれを賤しみ、其の姑の如きも、京女の新に來りて同居することを快しとせざりしにも拘らず、君は正當の理に循ひ、

遼遠　難色　粗敝　下物

自ら奮ひて遼遠殆ど外國の想ある鹿兒島に歸りて、其の姑に事へき。嗚呼尋常の女子ならんか、夫の携へ歸らんとするも猶難色あらん。否離婚をも請ふなるべし。君が己に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは、これを以ても知らる。況や京都より齎しゝ衣服調度の美なるものは、擧げて之を前妻の出にして鹿兒島にありし女に與へ、身には粗敝を纒ひ、日夜老いたる姑を看護し、其の酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、嘗て君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、いまだ月を累ねずし

杖柱とも憑む
(一)鹿兒島藩主島津齊彬。
保傅
取縋る
詠草
迂疎

て、忽ち君を杖柱とも憑むに至れり。

(一)國君順聖院公之を聞き、世子の保傅とし、親しく行爲を觀察して、大いに喜びて曰く、「われ人を得たり」と、世子夭す。君悲歎に堪へず、自刄して殉ぜんとす。姑取縋りて泣きて曰く、「われ今御身を失はゞ、何を樂しみてか此の世に生殘るべき」と。君之が爲に止りぬ。

正風嘗て君に就きて歌談を聽く。訪ふ毎に一婢ありて君が傍を離れず。又正風が詠草を返附せらるゝ毎に、必ず正風が母、もしくは姉にあてゝ送らる。當時正風迂疎にして、其の何の故たるを解せざりき。後に

周到
(二)齊彬の弟。
遇す
坤宮
大義名分

思へば、嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。

嗚呼忠孝慈貞誰かこれに加へん。後久光公の女香蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して東上して老女となり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。

稅所敦子

明治八年に至りて、坤宮女流の人才を徵し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君、順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず。正風說くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來、

両陛下御文學の諸務を掌り、御製、御歌の拜寫を始め、同僚、宮女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜安息に暇あらず。君もと蒲柳の質、しかも公事に服しては毫も攝養を意とせず、往年大いに病む所ありき。

蒲柳の質

天皇陛下、君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとし給ひ、特に正風をして内旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素厭嫌せし牛乳を服して氣力を養ひき。癒ゆるに及びて宮中に入り、鞅掌すること故の如し。

(三)明治天皇。

鞅掌すること故の如し

嗚呼君が八百年以來唯一人の女文豪たりしことは、世人皆之を知る。君夙く三寶に歸し、慈善を好むこと飲食よりも甚だしく、我が彰善會の起るや、最も熱心なる賛成者として、金員を寄附せらるゝこと屢、なりき。君去んぬる一月五日、正風が病床を問ひて告げて曰く、「明年七十七、所謂喜字の齡たらんとす。聊か自ら壽すべし」と。正風大いに之を賛し、爲に盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今は

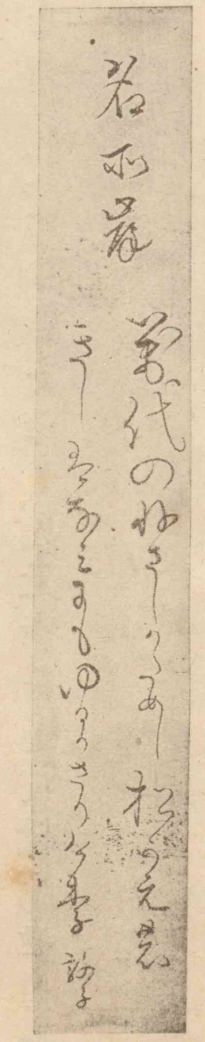
文豪

三寶に歸す

名所岸萬代の根ざしかためし松が枝の岸はなみにもゆるがざりけり　敦子

喜字の齡

詞藻



稅所敦子筆蹟

畫餅

つひに全く畫餅となりぬ。

慟哭

正風今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に横たはりて、葬場に會することを得ざるは何等の慘ぞ。何等の痛ぞ。豈慟哭せざるを得んや。病を力めて此の誄を草し、兒元彦をして代讀せしむ。嗚呼悲しいかな。

三四　キャベル孃

佳話

歐洲大戰亂に際して、女子が國事に盡せし佳話少からざるが中に、英國看護婦キャベル(一)孃の死ばかり、

聳動

世界の耳目を聳動せるは無し。キャベル孃は看護婦として、白耳義國のブリニッセル(二)にあり、故國に忠實なる心より、英佛白聯合軍の爲に計る所多かりしかば、千九百十五年八月五日遂に獨逸軍に拘禁せられ、同十一日死刑に處せらるゝに至れり。之より先、孃が拘禁の報あるや、諸中立國の公使は孃を救はんと熱心に斡旋し、各國の新聞紙皆筆を揃へて、孃の無辜なるを訴へしが、強

キャベル孃

(一) Brussels. 白耳義國の首府。

(二) 大正四年。

拘禁

斡旋

無辜

暴なる獨逸國は毫も之に耳を貸さず、名花一輪空しく國家の犧牲と散り畢りぬ。

嬢が死刑を宣告せられたる後面會せし唯一の人は、英國の僧侶にして友人なるカパンなり。嬢は意氣凛然、カパンに語りていふやう、

凛然

「私は今日恐れも致しません、たじろきも致しません。私はもう幾度も死を見ました。死は私にとつて珍しくも、恐ろしくもありません。」

たじろく

といひ、又

「私は今神と永遠との間に立つて、愛國の至情があるばかり、何人に對しても、憎惡の念や、冷酷の心を持つて居りません。」

といひて、平然として深く自ら決する所あり、カパンの別を告げて、「さやうなら。」といふや、

自ら決す

「私どもは再び逢ふ事が御座いませう。」

と言ひて、堅き信仰の色面に溢れたりといふ。

三五　徳川光圀

湯淺常山

水戸中納言光圀卿は頼房卿の第三の子、東照宮の御孫なり。寛永十年、威公(一)の嗣未だ定まらざりしかば、

(一)徳川頼房。

(二)徳川家光。

(二)大猷院殿の仰にて、中山備前守信吉水戸に至り、六つになり給ひし光圀卿を見て、かへりごとせしが、やがて嗣に定まり給ひぬ。正保二年、史記の伯夷傳を讀みて深く感じ給ふ。嗣は兄頼重の立ち給ふべき事なるに、かく定まりつれば、兄の子に家をば讓らんとの御志、此の時よりこそ起りたれ。

卿は學問を好み給ふ志篤く、明暦三年より大日本史を撰し始められぬ。神功皇后の帝紀にありしを后妃傳に入れ、大友皇子を天子と定め、南朝を正統と立てられしは、みな卿の志によるなり。寛文三年頼房卿

(三)常陸國久慈郡太田町在にあり。

卒去あり。僧家の法を用ひず(三)瑞龍山に葬り、威公と諡し、廟を水戸の城中に建てられ、祭祀の儀式を定め給ひぬ。此のとき殉死せんとする士ありしかば、君自らの家に行きて止めらる。此の事上に聞えて、殉死は天下一般停止たるべき旨、仰せ出さるゝに至れり。

徳川光圀

卿は兄頼重卿の子松千代綱方を、強ひて養嗣とせん事を乞はれたり。此の事もし聞入れられずば、世を

天聽

遯れん志なりしに、賴重も許諾ありしかば、卿は松千代の弟采女綱條をも引きとりて養ひ給へり。

綱方病によりて卒去せしが、弟綱條をも養ひおかれし故、やがて世嗣になし給ひぬ。延寶元年、孔子の堂を水戸に建て給はん爲、江戸駒込の屋敷に假りの設をなし給ひぬ。又日本古來の假字文を編みて三十卷とせられしが、此の事天聽に達して、後西院天皇より其の書の名を扶桑拾葉集と賜はりぬ。

天和二年朝鮮の使臣江戸に來れり。然るに其の進物の目錄、禮儀を失ひたりしかば、卿これを責めて三條の質問ありしに、使臣答ふる辭なかりきとなり。後西院天皇の勅命により、鳳足といふ御硯に銘を作られしかば、宸筆を下し給ひて賞美せさせ給ひぬ。其の御詞の中に、「備武兼文、絕代名士」といへる句ありしを、印に彫らせられきとなり。

元祿三年領國を綱條卿に讓り給ひ、權中納言に任ぜられたりしが、程なく辭表を奉られぬ。

位山のぼるも苦し老の身は
麓の里ぞすみよかりける

かくて常陸の久慈郡太田鄕の西山に引籠り給ひ

壽藏
碑陰の銘

ぬ。山莊の有樣、屋根には萱を葺き、門垣には蔦はひかかり、竹垣一重周らして、池に蓮を植ゑ、西山の邊に桃數百株植ゑて、川の流の橋を桃源橋と名づけ、鹿を放ち、鶴をかはせ給ふ。瑞龍山に壽藏を設け、衣冠を埋め、自ら碑陰の銘を作り給へり。

又久慈郡小野平村の旌櫻寺に祠堂を建てゝ、賴義、義家の神靈を祀り、又攝津の湊川に楠木正成の墓を修し、碑を建て、面に「嗚呼忠臣楠子之墓」と自ら筆し給ひぬ。

又彰考館を作りて、和漢の群書を集められ、遠國、他鄕に學士を遣はし、半紙、一行の反古をも、見るに隨ひて拾ひ收め給ひける程に、種々の書ども編集ありけり。中にも禮儀類典五百卷は、日本古來の寶典とも稱しつべし。

地の利をつくす術

又地の利をつくす術に心を用ひられ、山には漆、楮を多く植ゑ、野には馬を放ちて牧となし、海には海鼠、昆布をまき、蛤をはなち給へり。これより常陸の地に物產多く出づ。元祿十三年西山にて卒去あり、義公と諡せり。

—常山紀談—

三六　皇室に關する敬語

大日本は神國なり。神孫相繼ぎて、萬世一系の皇位を踐み給ふ。かみは上又は神にて、天皇は上即ち神にまします。現つ御神と稱へ、現人神と申し奉るも其の故なり。すめらみことは天下を統治し給ふ御方の義にして、みかどと申すはうちつけに御身の上を申すを憚りて、宮門を指していへるなり。漢語を用ひては天皇、皇帝、至尊、聖上、主上、今上等と申し、また陸海軍を統率し給ふより大元帥と申す。高御座、天位、寶祚、宸極

すめらみこと
うちつけに

等は皇位を申す語なり。

みや(御屋)、みくるま(御車)、みゆき(御行)の如く、みを冠して敬稱とし奉ること多し。みゆきを行幸、臨幸といひ、還りますを還幸、還御といふ。太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太子妃のいでましを行啓といひ、還りますを還啓といふ。又皇族方のいでましを御成といふ。

みくるまを車駕、龍駕といふ。乘輿、鳳輦、鸞輿は御輿なり。故に「鸞輿いづくにまします」「車駕某地に幸す」などいへば、やがて天皇を指し奉る語となる。

みやは御居處なり。九重、內裏、御所、皇居、宮城といひ、

駐蹕　鹵簿

又禁中、禁裏、禁廷、禁闕、鳳闕ともいふ。行幸の間しばし留らせ給ふを駐蹕又は駐輦といひ、其のおはします處を行宮又は行在所といふ。鹵簿は行幸啓の行列なり。

天皇の御見聞、御感想、御思慮を稱し奉るにはみそなはす、聞し召す、思し召す等の古語の外、漢語にては天聞、天聽、天覽、天德、叡感、叡聞、叡慮、聖聞、聖旨、聖鑑、宸襟、宸慮の如く、天、叡、聖、宸等の語を冠すること多し。又御尊體、御容貌、御動靜に關する敬語として、玉體、龍體、天顏、龍顏、玉步等を用ひ、御寫眞、御畫像には御影、聖影といひ、御座を玉座といひ、臨時の御休憩所を便殿といふ。

天機　儲嗣

天皇の御言はおほみこと、みことのり、又上諭、勅諭、勅命、勅語、綸言、宣旨、御沙汰等と申す。

宸翰、宸筆は御書なり。御作の詩歌を御製といひ、御盃を天盃といひ、御機嫌を天機といふ。

皇太子を東宮と申し、又春宮、儲嗣、儲君、儲貳と申す。皇子孫の生れさせ給ふを降誕といひ、內親王、女王の臣子に嫁し給ふを降嫁といふ。

寶算、聖壽は天皇の御齡なり。天皇及び三后のかく

れますを崩御といひ、皇族には薨去といふ。

天皇及び三后の敬稱に陛下、皇族の敬稱に殿下を用ふべきは、皇室典範に明らかなり。

かくの如く、皇室に關する敬語は極めて豐富なり。上古皇室にのみ用ひたる敬語にして、めす、おぼす、のたまふの如きは、中古以來或は攝關に、或は將軍に、尙廣く移りて一般貴人に對する敬稱となりたれども、其の大部分は儼として使用を誤ることなし。是君臣の分明らかなる我が國體の然らしむる所にして、他國には其の類例を見ざるなり。

—國定高等小學讀本—

攝關

儼として

自修文

三七　詞づかひ

我が國語に敬語多きことは、我が國家社會の組織に起因す。君臣の分古より定まり、長幼の序、儼として存するを以て、皇室に對しての敬語、尊長に對しての敬語は、上古より存在せしなり。

西洋諸國は個人本位の社會にして、其の皇室も本來は民衆より推されたるものなれば、皇室に對しても特殊の敬語なく、家庭向に於ても、父母、夫婦、兄弟、姉妹皆其の用語に別なし。忠孝を以て道德の根本となせる日本國民は、敬語の使用が、我が國民道德と密接なる關係あることを銘記せざるべからず。

銘記　しつかりとおぼえる。

敬語には先方の行作を敬ひて言ふものと、自己の動作を謙りて言ふものとあり。古き日本語には、給ふといふ動詞にも二種あり。「見給へば。」「聞き給へば。」といふ時は、先方の「見る。」「聞く。」を敬ひ、「見給ふれば。」「聞き給ふれば。」といふ時は、自己の見聞を謙りていふに用ひたり。今の語にて言へば、前者は「御覽になれば。」「御聞きになれば。」といふに同じく、後者は「見ますれば。」「聞きますれば。」といふに同じ。

敬語は文語にもあり。手紙の文の如きは、日常の談話挨拶にひとしきものなれば、よく先方に對する敬意を失はぬやう、又自己の謙遜の態度を守るやうに認むべし。但し餘りにくだ〳〵しく敬語を用ふるも、却つて失禮に流るべし。

地方より始めて出で來れる女中が、敬語の自他の使用法を誤りて、「車屋さんが來て、旦那樣は何時出掛けるかとお尋ねになりました。」などいふ類、誰かは失笑せざらん。されどもよく注意せずば、之に似たる誤に陷ること無しとせず。

敬語を用ふることは先方に敬意を表する所以たるのみならず、また自己の品位を保つ所以なり。敬語を用ふることは、日常禮儀の一つなり。

女子は殊更に其の言語に注意すべし。野卑なる用語を弄び、下品なる詞づかひをなす者は、淑女たるの資格なく、禮儀を知らざる者として擯斥せらるべし。

女子國文卷四終

通用字及び正字對照表

（茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
両	兩	塲	場	椙	杉	獵	猟	頤	顎
剪	翦	塚	冢	欵	款	玄	玄	秘	祕
劍	劍	戲	戯	殺	殺	瑣	瑣	窃	竊
効	效	墻	牆	殺	殺	畫	畫	竪	豎
拘	拘	拿	拿	毒	毒	留	留	篡	簒
殲	殲	寃	冤	氷	冰	略	略	箭	箭
款	款	寇	寇	涅	涅	痴	癡	粘	黏
抜	拔	即	卽	痴	癡	鼓	鼓	穀	穀
毒	毒	寶	寶	潤	潤	闊	闊	脈	脈
殺	殺	挿	插	攜	攜	帽	帽	胆	膽
涅	涅	捏	捏	整	整	并	幷	智	智
氷	冰	兎	兔	況	況	双	雙	恥	恥
略	略	卑	卑	決	決	厩	廐	舗	舗
留	留	即	卽	冒	冒	厨	廚	皐	皐
畫	畫	円	圓	円	圓	即	卽	致	致
粘	黏	免	免	准	準	収	收	裡	裏
篠	篠	勺	勺	凉	涼	廻	廻	褒	褒
穀	穀	効	效	減	減	廉	廉	賛	贊
脈	脈	塚	冢	唇	脣	既	既	賓	賓
胆	膽	墻	牆	往	往	昂	昂	陷	陷
智	智	拘	拘	晋	晉	熔	熔	間	閒
恥	恥	殲	殲	猪	猪	猿	猿	鶴	鶴
舗	舗	款	款	猫	貓	猴	猴	鬱	鬱
皐	皐	玄	玄	禀	稟	砲	砲	鬪	鬪
致	致	瑣	瑣	碍	礙	鹽	鹽	斷	斷
裡	裏	畫	畫	凝	礙	盜	盜	斧	斧
褒	褒	留	留	稟	稟	盜	盜	獨	獨
賛	贊	略	略	俟	俟	並	並	勦	勦
賓	賓	粘	黏	京	京	亡	亡	廝	廝
陷	陷	篠	篠	勅	勅	冲	沖	廁	廁
間	閒	穀	穀	敕	敕	富	富	妊	姙
鶴	鶴	脈	脈	野	野	坂	阪	孃	孃
鬱	鬱	胆	膽	埜	埜	嚴	嚴	姉	姉
鬪	鬪	智	智	岳	岳	婚	婚	娉	聘
斷	斷	恥	恥	嶽	嶽	嬉	嬉	嶋	島
斧	斧	舗	舗	弊	弊	奬	奬	庵	菴
獨	獨	皐	皐	奬	奬	慙	慙	慍	慍
勦	勦	致	致	考	考	慙	慙	忘	忘
廝	廝	裡	裏	攷	攷	慙	慙	恤	恤
廁	廁	褒	褒	普	普	村	村	邨	邨
妊	姙	賛	贊	普	普	邨	邨	邨	邨
孃	孃	賓	賓	邨	邨	邨	邨	邨	邨
姉	姉	陷	陷	邨	邨	邨	邨	邨	邨
聘	聘	間	閒	邨	邨	邨	邨	邨	邨
嶋	島	鶴	鶴	邨	邨	邨	邨	邨	邨
庵	菴	鬱	鬱	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	鬪	鬪	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	斷	斷	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	斧	斧	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	獨	獨	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	勦	勦	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	廝	廝	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	廁	廁	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	妊	姙	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	孃	孃	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	姉	姉	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	聘	聘	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	嶋	島	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	庵	菴	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	慙	慙	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	慙	慙	邨	邨	邨	邨	邨	邨
慙	慙	慙	慙	邨	邨	邨	邨	邨	邨

同字表（いづれにてもよし）

柿 柹 毘 毗 砧 碪 網 綱 荒 荒 蹦 蹣
案 桉 汙 汚 稿 藁 総 總 蔭 蔭 遁 遯
碁 棊 温 溫 競 競 綵 裞 虱 蝨 鉾 矛
棕 椶 烟 煙 筍 笋 組 紐 衽 袵 銹 鏽 陰 陰
楫 楫 無 无 笄 笄 羈 羈 訛 譌 陰 陰
稿 藁 猪 豬 粽 糉 舩 船 譁 嘩 雁 鴈
概 槩 狸 貍 糾 糾 艪 櫓 谿 溪 雞 鷄
朴 樸 睹 覩 紅 紅 花 華 踪 蹤 駈 驅

本來ハ略字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中＊標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

＊亘（コウ）瓦（クワン）
ワタル。「連亙」
桓ニ同ジ。

＊体（ホン）體（タイ）
笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。
カラダ。

＊但（タン）但（シヨウシ）
タバシ、タバ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。

＊僭（セン）僭（テン）
ミダリガハシ、猥。
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」

＊冑（チウ）冑（ナウ）
カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

＊協（ケフ）協（ケフ）
カナフ、叶。
オビヤカス、脅。

＊刺（シヤキ）刺（ラツ）
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク。乖戻。「亞刺比亞」

台（タイ）臺（ダイ）
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ。

＊後（コウ）后（コウ）
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」

商（シヤウ）商（テキ）
アキナヒ。
モト、本。

壺（コ）壺（シ）
ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

＊姫（シン）姹（シン）
ツ、シム。
ヒメ。

＊托（タク）託（タク）
拓ニ同ジ。オス、ヒラク。
ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

＊担（タン、ケツ）擔（タン）
ハラフ。又アグ。
ニナフ、カツグ。

改（イ）＊改（カイ）
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。

＊槍（サウ）鎗（サウ）
ヤリ。
鏘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

欠（ケン）缺（ケツ）
アクビ。「欠伸」
カク。「缺席」

糸（ベキ）絲（シ）
ホソイト、細絲。
イト。

＊羨（セン）羨（セン）
支那ノ地名。
ウラヤム。

＊虫（キ）蟲（チウ）
魚介類ノ總稱。又マムシ。
ムシ。

＊詫（タ）詫（タイ）
ワビ、ワブ。「詫狀」
詑ニ同ジ。アザムク。

＊詔（テン）詔（タウ）
ヘツラフ。
ウタガフ、疑。

＊證（ショウ）証（セイ）
アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。

豐（レイ）豐（ホウ）
禮ノ古字。
ユタカ。

＊迄（キツ）迄（セツ）
マデ。
ユク、行。

＊選（セン）撰（セン）
エラブ。（ヨリトル）
エラブ。（書物ヲ編纂ス）

郤（ゲキ）　ヒマ、隙。
卻（キャク）　シリゾク。「退卻」
鍛（タン）　キタフ、「鍛錬」
鍛（カ）　シコロ、鎚。

宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、道
しまふ　仕舞ふ
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

大正六年十月廿七日印刷
大正六年十月三十日發行
大正七年一月十六日訂正再版印刷
大正七年一月十九日訂正再版發行

（女子國文）

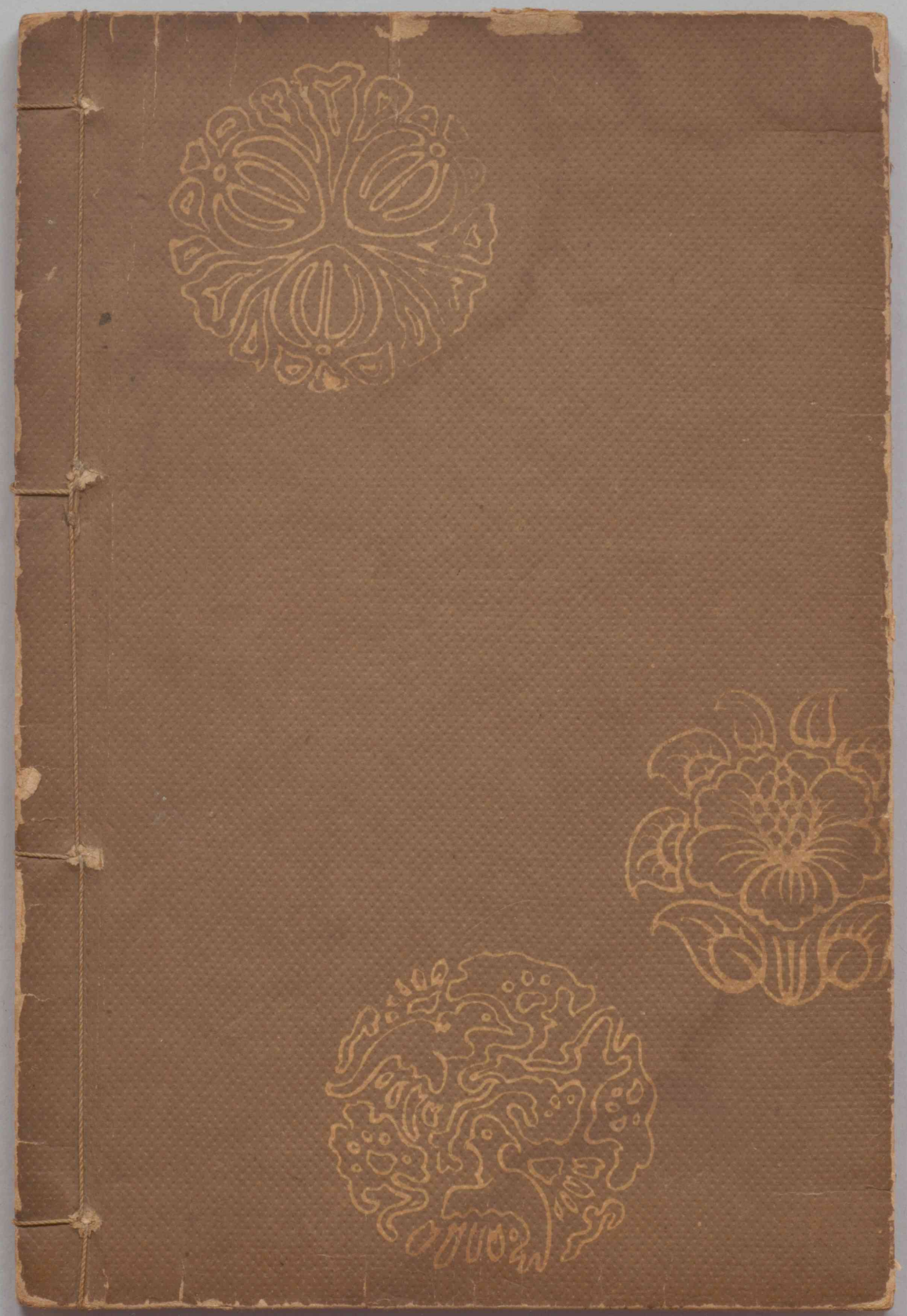
定價	
自一至四	各金參拾九錢
五、	金參拾八錢
六、	金參拾七錢
七、八	金參拾八錢
大臨時拾五年度	
自一至四	各金八拾六錢
五、	金八拾四錢
六、	金八拾壹錢
七、八	金八拾四錢

著作權所有

著者　芳賀矢一

發行兼印刷者　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房

代表者　合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷所　東京市神田區中猿樂町十七番地　中外印刷株式會社

發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
長電話神田三〇一四、神田三七六〇番
振替口座東京五〇一